エトF-34

發音學講話 全

高等師範學校教授 岡倉由三郎著

Yosisaburo

東京 寶永館書店

811.10467h

はしがき

國語の教授をば、上古文、中古文、さては近世の擬古文の讀み書きの練習とばかり、狹く思ひちがへた、極めて不健康な、所謂國學者流の考は、嬉しい事に、ちかごろ日にまし衰へ、その上、言語の本躰は、口ことばに在る事も知れわたるにつけて、其教課の根底を、發音の教練に据ゑようとする今日、この大事業に伴つておこる、大小各種の問題に對して、正確な智識を與へる、發音學上の書物の、本邦語で綴つたものは、新作ものに限らず、編纂ものに限らず、また飜譯書に限らず、近く板に成つた伊澤氏の視話法の外は、未だ一部として、纏まつて世に出てをらぬとは、何と嘆かはしく、遺憾至極の始末ではござらぬか。

この目下の大缺典の、幾分の補ひにも成らうかと、自ら揣らずして、この道の外國書どもを、あれよこれよと渉獵し、また自身のちとばかりの發音教授の經驗をも加へて、發音學の教へる事實の大綱にわどりたどり、主に本邦語の聲音の說明を目的として、をとゝしの末以來、をりをり筆を執り、稿の成るに任せて、『國語漢文講義』と云ふ、定時刊行の講義錄に載せて來たところ、塵も積もつて、いつしか埒からぬ頁數に

260934

達しました。その間、該講義錄の讀者は、自分の敢て當らぬ好意と十分の熱心とを以て、自分の蕪雜な講述を迎へてくれられた、其温き奬勵におだてられて、いつそのこと一部の書物に取纒めて、單行したならば、或は前述の缺典の萬が一なりとも、一層有力に補塡する事も出來ようかと、大膽にも思ひ定めた結果が、即ち、この書きものでござる。

かく取り纒めるについて、原文の誤脫を正し、多少の補正は施したけれども、其大躰は素より元のまゝ。このさき此れをどう改めていかうかと云ふ事は、この第一版に對する世人の注文を知つてから、充分躁りたい考ゆゑ、讀者に於ても、その心で、お讀みを願ふ。

この書の編成に當つて參考した書物の主要なものは、そつと次の通りである。

Bell, A. M.; Visible Speech. London, 1867.

Blaserna, P.; The Theory of Sound in its Relation to Music. New York, 1876.

Ellis, A. G.; Sheech in Song. Londan, 1977.

Sievers, E.; Grundzüge der Phonetik. Leipzig,1885.

Sweet, H.; A History of English Sounds from the Earliest Period. Oxford, 1888.

Sweet, H.; A Primer of Phonetics. Oxford, 1890.

Strong, H. A., Logeman, W. S., and Wheeler, B. L; Introduction to the Study of the History of Language. London,1891.

Meyer, G. H. v.; The Organs of Speech and their Application to the Formation of Articulate Sounds. London,1892.

Bremer, O.; Deutsche Phonetik. Leipzig, 1893.

Soames, L.; The Sounds of English. London 1897.

Victor, W.; Elemente der Phonetik des Deutschen, Englischen und Französischen. Leipzig, 1898.

Rippmann, W.; Elements of Phonetics. London, 1899.

發音生理を說く時には、生理學上の名目を、專ら、今田束氏の『實用解剖學』から採り用ゐました。圖解の原は、多くフレーメル氏の『ドイツ語の發音學』と云ふ書物から出てゐますが、自身の實驗に依つて日本語に適ふやうに多少變更を加へた處もあ

ります。

本書の讀者て、若し言語學に關する大躰の智識を同時に得たく思ふ方もあらるなら、文學士金澤庄三郎氏が抄譯に係る『ことばのいのち』文學士保科孝一氏の手に成つた『言語發達論』などを見らるゝがよろしい。また言語學雜誌の附錄として出る『言語學入門』の一讀はぜひにお勸め申す。

明治卅四年拾壹月

著者述る

發音學講話目次

發端……一
第一話　言語とは抑も何であるか……二
第二話　言と文との關係……三
第三話　發音と言語との別……四
第四話　發音學と言語學とは所屬の違ふ學問……六
第五話　發音學を研究する必要……七
第六話　音聲の原料と專門の發音機と……一〇
第七話　言語が思想交換の具と成つたは偶然の出來事……一三
第八話　呼吸器……一六

第九話　呼吸の作用……一八
第一〇話　氣管……二二
第一一話　喉頭……二三
第一二話　聲帶……二七
第一三話　喉頭腔とモルガニー氏竇と……二九
第一四話　咽頭……三一
第一五話　鼻腔……三六
第一六話　口腔と唇と……三七
第一七話　音韻の分類……四六
第一八話　鼻音……五一
第一九話　母韻……五八
第二〇話　父音の中破裂音……六八

第二一話　促音……七八
第二二話　所謂半濁音は一種の清音なり……八二
第二三話　摩擦音……八八
第二四話　父音の分類……一〇三
第二五話　音の結合……一〇六
第二六話　音の輕重……一一五
第二七話　音の長短と高低と音色……一二〇
第二八話　音韻の變化……一二五
結末……一三八

目次をはり

發音學講話

岡倉由三郎著

發端

發音學は、之を一と口に曰つて見れば、われわれ人間が言語の原料として用ゐる一切の聲音に就いて、其成りたち、其組みあひのありさま、その變轉の模樣などを調べる學問である。談話の際、吾々の使ふ發音の生理的方面と物理的方面とを專ら講究する物學びである。

すでに、言語の原料としての音聲を研究する學問であるからには、其物學びと言語そのものゝ生老病死の一切の事項を調べ、これに關する通理原則の講明を主眼としてゐる言語學との關係は、勿論淺からう筈がない。深い間からであつて見ると、發音學の話をするに當つて、一言、言語の性質を述べ、言語學と發音學との關係を明かにしておく事は、極めて大切だと思はれる。由つて先

づその向の事項の説明を以て、話の端緒を開かう。

第一話　言語とはそもそも何であるか

言語學は、主として言語の生老病死に關しての、通理原則を取調べる學問であると云ふ事は、「發端」の中で、一寸述べておいたが、それに付いて第一に人の起こす疑問は、言語とは全躰何であるか、と云ふ事であらう。この問ひに對して、答へる前に、此頃世間で善く云ふ、廣義と狹義と云ふ事を、話さなければならぬ。吾々が物の名稱を用ゐる場合に、廣く一般の意で用ゐる事もあるし、又狹く特殊の意で用ゐる事もある。例で言はうならば、「筆」「墨」などと云ふ語を使ふにしても、毛筆、鉛筆、ペンの別ちなく、物を書くに用ゐる、一切の筆類似の具を、「ふで」と概稱したり、墨汁でも、インキでも、同類のものを引きくるめて、「すみ」と總稱する事もあるし、又之に反して、毛筆ばかりを、「ふで」と狹く指したり、墨汁に限つて、「すみ」と狹く使つたりする事もある。これらの場合では、前の用ゐ方が即ち廣義ので、後のが即ち狹義のだ。

言語とは何か

廣義の答と狹義の答

それで、言語は何であるか、と云ふに對しても、廣義の返答も出來るし、狹義の答も出來る。先づ、廣義の答を曰つて見れば、「吾々が、相、互、の、思、想、を、取、り、か、はす、爲に使ふ、一切の方便」が即ち、言語である。そうすると吾々の日常使つて居る、この言や文が、言語である事は勿論、啞の手眞似、船舶などで用ゐる信號、其他、身ぶり、眼くはせ、の類に至るまで、いづれも言語で、畫家、彫刻師などの製作品も、製作者の考を世人に傳へやうと思ふ點から見れば、これまた言語である。

次に、言語の狹義の解釋は如何であるかと云ふに、狹く解く時は、「思、想、交、換、の、爲、に、吾、々、が、用、ゐ、る、諸、種、の、方、便、の、中、で、吾、々、の、發、す、る、音、聲、を、原、料、と、し、て、そ、の、上、に、意、味、を、宿、し、た、もの」と云ふ事に成る。これが、世に所謂言語の、極ざつとした定義であるが、この狹い意味で云ふ言語、即ち、口ことばを、主題として調べる學問が言語學で、言語學は、口ことば以外の、廣義で云ふ、言語をも、口ことばの充分な既明の爲に、參考として、調べないではない、又調べて大に發明する所も、あるには違ひないが、それは客としてで、この口ことばの研究が、言語學の主眼であるのだ。

第二話　言と文との關係

言語學の主題として調べる品物は、これで、略知れたが、讀者の知つての通り、開明の度の、やゝ進んで居る國には、口ことばの外に「文」と云ふものがある。それは、目標を設けて、言語を形に表はしたものに外ならぬのではあるが、或る國の人が現に口にして居る口語を、其まゝ表はして居るとは限らず、其國のやゝ昔の人の口語、又はそれと想はれて居るものを表はして居る事が、まゝあるから、たとへば我が國に於てのやうに、言と文とが一致して居ない事もある。去かし言文は密接して居るにもせよ、居らぬにもせよ、とにかく、文は言即ち口語を目標で表はしたもので、いはゞ口語の衣服に外ならないのであるから、文もまた言語學の研究の題目である事は、勿論の話、それから、文として口語を表はすに付いては、これが爲に用ゐる目標、即ち、文字の調べも、言語學に因緣の深い研究であると云ふ事は、言ふまでも無からう。

言文の關係

第三話　發音と言語との別

上に述べたやうに、言語學の主題は、狹い意味で云ふことばであるが、其言語の原料は、吾々の發する音聲に外ならぬ。例を繪畫に取つて言はうなら、着色に

用ゐる諸種の顔料（エノグ）が、音聲で、其顔料を用ゐて描きあげた、一幅の畫が、即ち、「ことば」である。それ故に言葉に取つては、音聲の大切なことは、繪に顔料が大切で、顔料が無くては、繪が描けないのと同樣で、音聲を離れては、言語は成りたゝないのである。てはあるけれど、顔料と繪とは自ら別物で、顔料そのものが、直ちに繪てはない通り、音聲はあくまでも音聲で、言語とは別物であると云ふ事を、忘れてはならぬ。顔料を合せて、人物なり山水なりを寫せば、一つの意味のある者、即ち、人物なり山水なりを示す形となるけれども、其れを描くに用ゐる顔料を、無意に、片端から紙に塗り付けたからとて、それは人物でも山水でも素より無い、只顔料に過ぎないのである。音聲にしても、其通りで、種々の音聲を組み合せて、たとへば、『まことに、うつくし』と云ふやうに、意味のある形に、これを組みたてれば、心が其上に宿るが、之を逆にして、『しくつう、にとこま』と云つては、何の意味も成さない。つまり、一連の音聲であるに止まる、決して、言葉では無いのである。偖が意味のある顔料であるやうに、言語は意味のある音聲で無ければならぬのだ。だから、發音と言語とは大層異なつた物で、決して混同

されてはならぬのであるし、又誰も混同しさうもない物ではあるが、實際に於ては、中々さうでない。この二つを交ぜこぜに論じて居る學者が、言語の事を、かれこれ云ふ、文法家の間にさへ隨分多い。たとへば、嬰兒はアの發音から發し始めるから、人の言語の原始の音、根本の聲は、アである、などと論じて得意になつて居るのも、この二つを混じて考へるからである。

第四話　發音學と言語學とは所屬の違ふ學問

音聲は言語の原料であつて、音聲と云ふ原料の上に、意味が宿つたのが、言語である、と云ふ事が、知れゝば、發音學(また、發音學、音韻學などとも云ふ)と言語學との區別は、更めて述べるまでも無く、充分明かだと思ふが、發音學の方は文字の示す通りに、吾々が言語を使ふ、其原の材料として發する音韻に就いて、其性質、構造等を取調べる科學に外ならぬのである。發音學は、つまり言語の原料調べをする學問で、畫で言はうなら、畫家の用ゐる顏料に就いて、其成立ちや其性質を調べる學問であるのだ。それであるから、學問として見て、この二つは全く別々の部門に屬して居る。發音學は、一般の音響の中で、人が言語を作る

時、原料として用ゐる音響の、なりたち等を調べるので物理學で云ふ音響學の一種でもあり、且つ、其音響を發する爲に用ゐられる、人身の部分の構造、即ち、發音生理學を說くから、其點から考へれば、一般の生理學の一部分でもある。それで、生理學や音響學は動物學や植物學と同じやうに、物質界を支配して居る自然の法則を調べる學問であるから、其一部分の發音學もまた、均しく自然の法則を研究する學問に屬する。言ひ換へれば發音學は一つの物界學である。が、言語學は、之れに反して史學、心理學、美學などと同一で、人間が、音韻の上に宿した意味に就いての研究をする學問で、人心と云ふ微妙な機能の働いていく樣子を調べる學問、即ち心界學の一部を成すのである。故に、學問として見ても、彼れと此れとは、性質を異にして居ると云はねばならぬ。

第五話　發音學を研究する必要

言語學と發音學とは、學問として所屬の違ふ、異質の者ではあるが、前者は、意味のある人の音聲、後者は意味を離れての人の音聲、に關する學問で、其扱ふ物質は、共に人の聲音であるから、二つの間の關係は、素より淺くない。其れで、と

の二つの學問に從事する學者は、互に力を借し合つて、大に相互の利益を得る事であるが、言語學が發音學から得る所得は特に多い。たとへば音便だの通音通韻だのと云ふ、語の外形の變遷に關しての、色々の現象を、正しく理解しようと云ふには、發音學が教へる、音聲の出來方の理法を、是非一通りわきまへて居なければならぬ。その一通の理法をも、心得ないで、世間で謂ふ一音一義說や、通略延約の手續きを濫用して、語原などを說かうとするのは、豆鐵砲で鶴を射落さうとするより、今少しむづかしく、當らないのが當りまへ、當るのが不可思議である。

發音學は、言語の講究に取つて、かやうに大切な學科であるが、不幸にも我が國には、發音の理法に就いての智識が、殊に缺乏して居て、今日まで、發音學＝現今の歐米諸國に於ては、ヴィーヴェルス、フィエトル、パスイ、スウイート、ロイド、グランヂェントなと云ふ名たゝる學者の先導の下に、日進月歩の勢、駸々乎として殆ど際涯を知りがたい程まで、盛んに研究されて行く、この發音學＝に就いては、其大躰を我が國の人に紹介した著述が、近頃出た伊澤氏の視話法の外、どの

樣な形にもせよ、一部も經つて世に出て居ない位である。尤も我が國でも、かなり古い時分から、彼の印度に起つた、發音法に關しての智識を基礎として、韻鏡と云ふ漢字の發音を書き顯はす、巧妙な法式が漢土に出來て、その法式が、本邦に傳はると共に、其れを理解する爲に必要な發音上の智識が、多少、本邦人に有たれるやうに成つた事は、事實には相違ないが、早い時代から、支那語を、外國語として習つて來なかつた多くの弊害の一つとして、その法式の眞相は、極少數の人にのみ理解されたばかりで、否寧ろ一人の人にも充分には、理解されずに、近頃まで過ぎて來たために、漢土に起つただけの、發音上の事實の講究も、傳はらずにしまつたのだと云つても、餘り失言ではあるまい。何ともなげかはしい事柄ではないか。

かやうな次第であるから、其中誰か恰好の發音學上の著述を世に公にするであらう、それまでの、せめてはの穴ふさげに、茲で發音學のあらましを述べようと思ふ。しかし。一般に通じて整々堂々と發音學の主義原則を述べるわけには、到底行かず。した處で、多分讀者の倦怠の種に成るに止まるだらう

から、茲で說くのは、主に日本語の音韻の組織を解する爲に、是が非でも必要である、發音に關しての、正しい、常識を授けるので、滿足してれく外はあるまい。

第六話　音聲の原料と專門の發音機と

音聲の原料

言語の原料が、音聲である事は、既に幾度も述べたが、さて其音聲は、何を原として出來るか、と尋ねて見ると、音聲と云ふものは、吾々が絶ゑず行つて居る、呼吸の作用のために、吾々の口や鼻から出たり入つたりして居る空氣、即ち、息が出入の際に、途中の、いはゆる壁や障子に觸れて、或は物を押し破るやうな、或は物と摩擦するやうな、色々な響と成つたものに外ならぬ。これ故音聲の原は、氣息であるが氣息は、誰も知つての通り、鼻や口から出たり入つたりして居るものであるから、音聲を作る爲には、其吸ひ込まれる時のを、使つても、吐き出される時のを使つても、善いわけだが、通常は、吐く方の息を用ゐるのが、習はしに成つて居て、吸ひ込む方の息は、殆ど全く用ゐられない事に、どこの國語でも成つて居る。これは、吸ひ込む方の息では、吐く息てのやうに、自由に音聲が作りにくいからである。

專門の發音機

音聲の原は、吐く息であるとして、全躰吾々が、呼吸の作用を有つて居るのは、音聲の原を造る爲にではない。吾々に呼吸の作用のあるのは、吾々の身躰を循環して居る血液が、躰を一廻りして來る爲に、穢くなつてしまふ、其穢く成つた血液を、一洗して、再び清淨な、新鮮な血に改める爲で、吾々が、音聲を作らうと作るまいと、そのやうな事には、一切關係なく、呼吸の作用は行はれるのて、たとへば、深夜、吾々が熟睡して居る際でも、呼吸の作用は、依然として行はれて居るのだ。音聲は、この通り身の營養の爲に、是非必要である作用から、どの途、行はれて居る、呼吸の息の、締り路を利用して、その上に、種々雜多の役目を附けたものに外ならないのだから、どうでも流れて行く河の水に、水車を轉させるのと同じ事である。

音聲の原料は音聲を作る爲に特に設けてあるものてはなく、全くの借りものであるから、其原料を起したり、其れを通行させたりする爲の、機械も亦、勿論借り物であるが、かく借用する原料に、色々と細工を加へて、種々雜多の役目をさせる其爲の道具は、音聲專用のものかはたまた、これも借用の品かと云ふと、俗

に喉笛とも喉佛とも云ふ、喉の中程にある、喉頭の内部に、母韻や濁音の、根本の性質を備へる、仕組みがある、その組織だけは、どうやら發音專門のものらしいが、その外の發音に使はれる道具は、いづれも、例の借用品ばかりである。言つて見やうなら、世に謂ふ鼻音を作る爲には、鼻の奥座敷、即ち、鼻腔を用ゐ、舌音や、齒音や、唇音などを拵へるには、舌、口蓋、齒、唇、唇を、それぞれ使ふことは、使ふが、これらの道具には、銘々嗅ぐとか、舐るとか、噛むとか云ふやうな、本務があつて、發音の爲に働くのは、ほんの一時の兼勤に止まる。して見ると、人間を人間とさせるに、かばかり大功のあつた言語＝この靈妙不可思議の言語＝の原料である音聲を作る爲には、喉頭の組織の外、元本の息を初め、その息に着色して、それぞれの任務を果させる道具にも、何一つ、專用の者がなく、皆借用の品だと云ふ事は、誠に奇妙千萬ではないか。だが、また一方から考へて見れば、言語の原料の音聲が、其原である息から始めて、それに細工を加へる、色々の機械に至るまで、殆ど皆、借り物で、萬事手輕である、れつくうで無いと云ふ事が、反つて緣となり、取り柄となつて、言語の原料として使はれるやうに、成つたのでもあらう。

言語は人間の天然の所持品に非ず

第七話　言語が思想交換の具と成つたは偶然の出來事

かやうに、言語の原料の事に就いて、話すにつけて、一つ讀者の注意を促しておきたい事がある。外の事でもないが、世には、現存の一切の人類が、其開化の程度の高下に拘はらず、皆とにかくに口ことばを有て居るのを觀て、口ことばは、人間の自然に備へる等に成つて居る、一つの機關である、人類の天然の所持品である、と云ふやうに考える人が、隨分あるけれど、それは、ちと速斷に過ぎて居ると曰はなければならぬ。さう云ふ風に考へる人々は、自分たちの考の金城鐵壁として、人に發音の具の備はつて居る事を、憑むのであるが、其發音機も、また發音の原材料も、まづまづ皆他の目的の爲に備へられて居るのだから、それは議論の根底とは成らぬ。只一つ、例の喉頭と云ふ、發音專門の道具と思はれるものが、其說を固めるやうではあるが、是とても、善く考へて見ると當てにはならぬ、と云ふのは、喉頭は、實際、發音專門の具であるにしても、また其發音の機械は、言語の原料を供へる爲に設けてあるものとは云へぬ、例へばそれで作

る音聲で、他の者を畏れさせ、身の安全を謀ると云ふやうな、言語を作る爲とは、別の目的の爲に、設けられて居るのかも知れぬからである。例を仕方ことばに取つて、曰つて見れば、吾々は、貴人に對し、挨拶の爲に、低頭平身する事がある。これは尊敬を示す、一つの仕方であるが、この仕方は、初めから尊敬の意を示す爲に、特に出來て居るものであらうか。多分は、さうであるまい。其初めは吾々が恐ろしい物に遇ふと、恐ろしくて義理にも我慢にも、ぢつとして、見る事が出來ずに、われを忘れて面を地に伏せ、身を縮ませて、平伏したので、その時は、敬意を表はす、と云ふ考へはなかつたが段々と恐怖を示す符合と成り、畏縮を示す姿となり、遂には、敬服や尊重の意を表はす事と成つたものだらう。若しさうだとすると、低頭平身する事に、初めから敬禮の意はないので、その意の宿るやうに成つたのは、後の事で、寧ろ偶然の事と曰はなければならぬ。人が喉頭を用ゐて、音韻を發すると云ふ事も、其初めは、言語の原料としては無く、たとへば、鵙が、犬か猫に追ひつめられた苦しまぎれに、身から惡臭を放つ類で、喜怒哀樂の情に切まつて、知らず識らず音聲を發するものであつたものが、後には發音が目的で、故意に發音するやうになり、その發音の上に意味を期約して、それを思想交換の手段とする事の方が、身振りや手似真などより、思想交換の方便として、遙かに優等なものである事に氣がつくやうに成り、所謂、適者生存の原則に基いて、他の諸の方便を出し抜き、この音聲を種としての方便が、一番發達する事に成つたものであらう。さすれば、初めから、口ことばが、人間の思想交換の具と定まつて居たのではなく、これも、身振や手真似のやうな、仕方ことばと同列の、ほんの一つの方便であつたのだが、他を凌ぐに足る程の、優等の點を具へて居た處から、追々に、言語が、人間固有の、先天的の、思想交換の具であるかのやうに、想ひなされるに至つたので、人間が、音韻から言語を拵へる、換言すれば、音韻を、思想交換の道の原料に、採り用ゐると云ふ事は、偶然の事と云ふべきものであらう。それ故、發音專門の道具、即ち、喉頭の組織が、人間にあるからと云つて、人間には、口語を思想交換の具とすべき、生れ有つたる必要があるのだと、直ちに考へるのは、粗漏である。其證據には、禽獸にも發音の機は、現にある事はありながら、それで作る音聲で、言語と名をつけるに足る程のものは、犬や鶏鵙の樣

な、高等の禽獸でも、搾へあげはせぬではないか。

第八話　呼吸器

言語の原料は、音聲で、音聲はまた、呼吸の息に、色々細工を加へた者とすれば、音聲の話の初に、其れほ元の呼吸の作用の事を說くのが、至當の順序であらう。

横隔膜

呼吸の作用のおこりは横隔膜の短縮にあるので、横隔膜といふは、俗にみぶ（胸骨の劍狀突起）のあたりを其頂點としてゐる、先づ饅頭笠を伏せたとでもいはうやうな形の、胸と腹とを界する一種の膜である。横隔膜の下面、即ち腹部の方には、胃袋と肝臟とがあり、其上面、即ち胸の方には、左右に肺臟、中央に心臟が載つて居る。心臟は、諸君の知つての通り、躰內の血液の循環を掌つて居る、大切な樞機であるが、肺臟はまた、躰外の空氣を躰內に導き入れて、一度躰中の諸部を廻つて汚く成つて歸つて來る、血液を再び清淨にする役目のある、兩個の袋狀の器である。我々の喉の中頃には、喉笛又は喉佛と云ふ塊がある、其塊は、氣管と云ふ息の通る管の上の端にある裝置で、それから氣管に傳はつて、段々下へ下がつて行くと、其管は、胸の中程で二路に分岐して、一本は右へ一本は左へ向いて進んで、前述の肺臟に入り込んで居るが、肺臟と云ふは、其實、この氣管の二た股に分かれた所謂氣管枝の更にあまたに分岐し、枝からまた枝が指して、殆ど無數に別かれて居る、總躰を指す名稱に外ならない。氣管枝が、更に小氣管枝に別れわかれて肺臟を形成する、其一番のをはりは、茶袋の樣な細長い袋で終つて居る其袋の全躰はまた、丸て桑の實か、葡萄の實のふさふさと生つて居るやうな、醫者の語で、肺胞と云ふ球で出來て居る。また肺胞の周圍には、血管網と云ふ血の筋の網が張つてあつて、肺胞中の空氣が其網の中を通ふ、血の流れに働きを及ぼすやうに成つて居る。

氣管枝

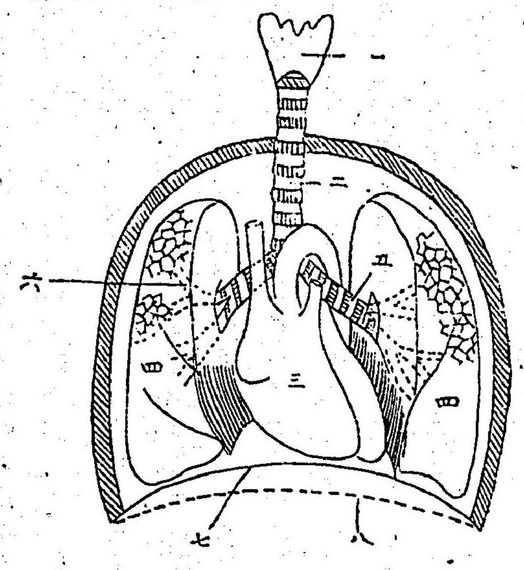
肺胞

血管網

肺臟の構造は、ざつと此やうなものだが、其全躰の形狀は、そば饅頭を、竪に、二つに切つて左右に引き分けたやうなもので、色は灰色を帶びて白く、馬の毛なみの連錢芦毛と云ふものに似た、紋理がある。右の方は短くつて大きく、左は長くつて小いが、右は上中下の三葉に、左は上下の二葉に裂れて居る。また肺の質は、海綿の如くで、彈力がある。

今まで述べた、身躰の部分を、圖に依つて示せば、第一圖の示す通りに成る。

第一圖　呼吸器の全躰



一、喉頭（即ち、喉佛）
二、氣管
三、心臟
四、肺（右のが左肺、左のが右肺）
五、氣管枝
六、小氣管枝
七、横隔膜（張つて居る時の）
八、横隔膜（縮んで居る時の）

第九話　呼吸の作用

そこで、呼吸の作用は、どうして起こるかと云ふと、初に話した通り横隔膜の短縮から始まるので、通例の場合では横隔膜は脈が三つ搏つごとに一回の割

合で其全面を收縮し、第一圖の「八」の點線が示す位置まで下つて來る。すると胸部には「七」と「八」との間の空間が出來、その空間だけ腹部の肝臟や胃袋が壓し下げられる。胸部に空間が出來ると、その空間を充塡する爲に、躰外の空氣が口か鼻か又は其兩方から、前述の氣管を通り、氣管枝に傳はつて肝臟に入りこむ。これが、呼吸の吸、即ち、引く息で、息を吸い込む時は腹の方が張る事は誰も、常に經驗する所の事實であるが、その事實は横隔膜の短縮を示すのである。

横隔膜は縮んで、ある點まで達すると、又々そろそろ伸張の運動を始めて再び原位に還る。この作用は、横隔膜がわざわざ求めてする働ではなく、云はゝ其短縮の結果として現れる自然の運動に外ならぬ。先に述べた通り、肺臟には彈力が具はつて居るから、其れが、侵入の空氣の爲に一旦押し擴げられた後は、再び原の姿に彈ね戻らうとする。そればかりでも侵入した外氣は自然突き戻される道理だが、彈力のあるのは、肺臟ばかりでなく、横隔膜の下面の胃袋にも肝臟にも、亦彈力があるし、躰外の空氣は、横隔膜の壓迫で多少押しだされた腹そば壓して、原位に還さうとするから、横隔膜が短縮して一定の度に達し、

もはや下に壓す力が無くなると、その膜は、腸に壓し戻されて、せん方なく原位に復す。さうすると胸部の空間は、ろれだけ減じて狹くなる。隨つて肺臟が、縮められて、中の空氣が追ひ出される。中の空氣は、いやおうなしに元來た路に傳はつて、又々外界の空氣に結びつく。これが、呼吸の呼、即ち吐く息の作用である。

吐く息

それ故、呼吸の働きは、横隔膜の上下動に基因するので、人の死ぬ時は、外界の空氣が、腸を壓しつけて、横隔膜をたし上げたきりで終るのだから、死人の腹はいつも背に付くやうに、へこんで居る。また人が氣絶して呼吸を失ふ時も横隔膜の活動は止まるので、この場合に柔術家などが「活」と稱へて、手の掌で背の中程を搏ち、又は腹部を兩手にて急に突きなどして、息を吹きかへさせるのは、つまり、止まつて居る横隔膜の運動を、再び始めさせる、人工呼吸法の一方便に過ぎぬのだ。

「活」

横隔膜が、呼吸に大切な事は、上に述べてれく通りであるが、其働きが不充分に成つたとて、または其働が止んだとて、人は死んだり氣絶したりするとは限らぬ。西洋の婦人は、我國の婦人が、臀の小いのを美人の大切な資格のひとつと思つて居るやうに、胸元の細くくびれ込んだのを、美しい姿だと考へて居るから、交際場裡へ出て、人々に美人と仰がれ、美形と羨はれやうと云ふ、特に年の若い婦人たちは、コーセットと云ふ胴をしめる道具を用ゐて、ちやうど横隔膜のあたりを、かたく壓めつけるから、横隔膜の運動は殆んど全く止められる。その場合には、肋骨が左右に多少開いたりつぼんだりして、肺臟に空氣を往來させる。これは、コーセットを用ゐて横隔膜の作用を妨げた場合ばかりでなく、姙娠して月が重なり、腹の子が大きくなると横隔膜の下行は大に自由を失つて、呼吸するのに、肋骨の開閉を憑むやうに成る。呼吸に肋骨を使ふにつけて、肩の骨が動搖する所から、俗に姙婦は肩で息をすると云ふのである。

肩で息

肩で息をするのは、姙婦に於て見られるばかりでない、我々が競走などした後で、激しく息をする場合には、やはり肩で息をつく。これは、横隔膜は常の通り働いては居るがそれが許すだけの呼吸ばかりでは物足らぬ所から、肋骨の開閉運動までを借りて、盛んに呼吸するからだ。

第一〇話　氣管

呼吸の作用はひと通り、これで述べをはつたから、今から横隔膜の短縮に基いて、肺臓の中へ這入つた空氣が、其伸張の爲に、肺臓の中から追ひだされる時の息の戻り路に隨つて漸次に上の方の機械の話をしよう。

出て行く空氣が、肺臓を離れると共に通る路は、例の氣管枝で、氣管枝を少し進むと左右の空氣が一處に出遇つて、一躰と成り、そこからは氣管と云ふ道に傳はつて上の方へ行く。その氣管の行きづまりの處に、喉佛一名喉笛と云ふ裝置がある。この氣管と氣管枝とには、其壓しつぶされる事を防ぐ爲に、軟骨の環がすこしづゝ間を措いて嵌めるあるが、其數は凡そ二十箇ばかりで、其形はローマ字のC字のやうに、前では環に成つて居るが、後では其兩端が離れて居る。ちやうど、曲玉と一緒に出る金環のやうな環であるのだ。小氣管枝にも、軟骨の環は、無いでもないが、至つて不齊で、しまひには見えなくなる。

上述のC字形の軟骨を連結して居るのは、纖維膜と云ふ大層彈力のある膜で、その次に滑平筋纖維と云ふ肉があり、最後に、管の內側に沿つて、粘膜と云ふ

滑いゴムのやうな皮が張つてある。この全躰が即ち氣管を構成するので、鳥など料理する時、喉を獵分つて見ると容易に氣管の樣子を知る事が出來る。鳥の場合では、俗にどりと云ふのが肺臓であるのだ。

第一一話　喉頭

氣管を抱いて居る環は、いづれもC字形で、後部、即ち、氣管の裏手を通つて居る、食管に面しての側は、途切れて居るが、只一つ其最上端にある環ばかりは、外の環と違つて、全い環であるのみならず、躰も餘程大きい。其形は、前は低く、後に行くに隨つて段々と高く成つて、其兩の肩とも云ふべき部分は、大層いかつて居る。其樣が丸で、指環のやうである所から、學語で、之を環狀軟骨と云ふ。

試みに胸板の中央から、下顎の中央まで、喉の眞正面に垂直の線を想像で描いて、其線に沿つて、胸の方から、拇指の腹でそろそろと顎の方へ摩で上ると喉の附け根の窪んだ處の直ぐ上部に、骨のある事に氣が付くであらう。その骨が、即ち、環狀軟骨の前端である。

指を以て、尙其上の方へ探り進むと、環狀軟骨の前端の直ぐまた上部に、やは

甲狀軟骨

り骨の三角に突き出て居る尖つた角に觸る。これが、俗に謂ふ喉佛の尖で、これは指でさはつて見るまでもない、少し痩て居る中年以上の男子なら、外見で直く知れる。殊に、唾を飲みこんで見ると、其骨が環狀軟骨もろ共に、上つたり下がつたりするのが、著しく見える。この三角形の骨とおほしく感ぜられるのは、甲狀軟骨と云ふ骨で、ちやうど二枚折りの腰屏風を、直角に開いたやうな形をして居る。其屏風の折れ目の上の角が、喉佛の尖りを成す處で、其兩翼の下の隅には角があるが、其角は、各、環狀軟骨の腰に据えてあつて、附着點を中心にして、甲狀軟骨全躰が、多少前後に搖ぐ事の出來るやうに仕組んである。指を以て喉佛の尖の上を押すと、ぶくぶくと窪み、其周圍に左から見た「く」の字形の骨の緣のあるのを覺える。これが即ち甲狀軟骨の兩翼に折れ曲つて居る上の角であるのだ。甲狀といふは「鎧の形」と云ふ事で、此骨が、環狀軟骨の前面を保護する事鎧の胴が中の躰を蔽ふ樣に、よく似て居るから、この名稱がある。

喉佛の尖りを經て、一層上の方へ、指で摩で進むと、其少し上の處、顎の裏が盡きて、喉が始まるあたり、言ひ換へれば、顎と喉との「コ」の字形を成して居る曲り目の處に、一つの骨がある事を探り知るであらう。これは舌の附け根にあるU字形の、舌骨と云ふ骨の前端であるが、其左右の角の末は、甲狀軟骨の兩翼の上の隅にある角に、筋肉でつなぎつけてある。

舌骨

環狀軟骨の腰の處には、甲狀軟骨の下角が載つて居る事は上に云つたが、其左右の肩にも亦、二つの、三つ目錐の形をして居る、小い軟骨が載つて居る。これを破裂軟骨と云ふ。破裂軟骨は、筋肉で環狀軟骨へくゝり付けられて居るが、其れと甲狀軟骨の內側の折れ目の中程の間には、甲狀破裂靱帶と云ふ筋の綱が引き渡してある。破裂軟骨にもまた種々の筋が、種々に掛けてあつて、其起伏轉回の運動を、色々に變へるやうにしてある。

破裂軟骨

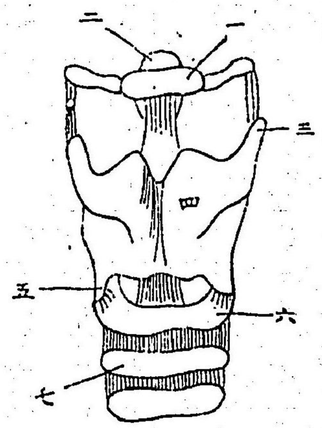
甲狀軟骨の尖りの處と、舌骨の前端との間にも、筋の綱が張つてあつて、其裡手の處に、ちやうど食匙を逆樣に立てたやうな、會厭軟骨といふ軟骨が据えてある。この軟骨の頭は、舌の根元の處へ出て居るが、場合に依つては、頭は下へ向つて曲げられる。即ち、この軟骨は、れ辭儀をする事の出來るやうに成つて

會厭軟骨

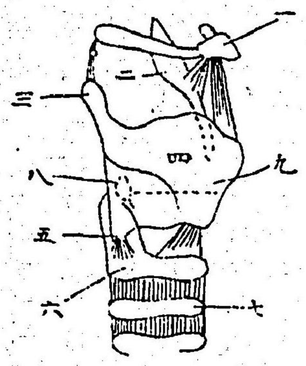
居るのである。

今まで述べて來た事柄を圖で示すと、第二圖と第三圖が示す通りに成る。

第二圖
正面から見た喉頭



第三圖
側面から見た喉頭



一、舌骨
二、會厭軟骨
三、甲狀軟骨の上角
四、甲狀軟骨
五、甲狀軟骨の下角
六、環狀軟骨
七、氣管の不全環の最も上の者
(一)から(七)までは前に同ト
八、破裂軟骨
九、甲狀破裂靭帶

第一二話　聲帶

これまで述べたのは、專ら喉頭の構造に就いてゝあるが、これからは、發聲の器としての、其裝置を少しく述べて見よう。

前にも云つた通り、氣管と云ふ息の通る筒の裡面には、粘膜と云ふ、ごむ質の、薄皮が張りつめてあるのだが、この粘膜は、環狀軟骨の內面を蔽うて上に昇ぼるに連れて、前陳の甲狀破裂軟帶をも包む。然るに、この軟帶は、既に諸君の知らるゝ通り、環狀軟骨の左右の兩肩に位してゐる破裂軟骨と甲狀軟骨の角隅の一點との間を結びつけてゐる筋であるから、これを上から覗いて見ると、環狀軟骨の後部と合して、一つの三角形を成してゐる。それ故、これを蔽うて進む粘膜も亦三角形を成すはずである。この三角形が所謂聲門で、この門は、破裂軟骨に附着して其軟骨をば色々樣々に牽引する筋肉の作用で開鎖せられる事がある。それで聲門を閉ぢてゐて、肺臟から息を送り出せば、その息は遮斷せられて、通過する事は出來ないが、その場合に、閉鎖の度をば少し寬やかにして、息を兩の門扉の間から、强ひて押し出だせば、兩の門扉は、ごむ質の上被

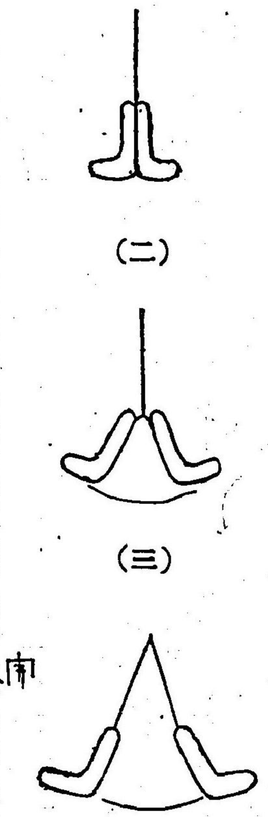
が掛けてある上に、全躰が彈力ある筋から成つてゐるので、自然左右に一旦開いてはまた閉ぢ、開いては閉ぢ、頻りに開閉して、一種の音を生ずる。アイウエオの樣な母韻は、即ちこの急劇な開閉に由つて生ずる音であつて、これを生ずる爲めの門扉の粘膜で蔽はれてゐる緣を聲帶と云ひ聲帶の急劇に開閉する爲に起こす運動を聲帶の鼓動と云ふ。

聲帶

さゝやき

聲門と云ふ名は、聲帶の扉の緣の全躰で圍つて居る者を示す名であるが、其中の破裂軟骨に附着してゐる部分を軟骨聲門となづけ、軟骨聲門と、甲狀軟骨の角隅に於ての聲帶の附着點との間の部分を、靭帶聲門となづけて、其中の區別を建てる事がある。それで、通例の呼吸の時には、聲門は、充分開いてあるので、母韻や、鼻音や、半濁音と云ふ者でない濁音を出す時は、いつも聲門は鎖され、聲帶の鼓動が起こされるのである。開かれ方、閉され方には各、強弱の度の差が中々あるが、その外に半開とか半閉とか云ふべきものがある。それは、靭帶聲門のみを鎖して、軟骨聲門をば、打ち開いてゐる場合で、吾々が互に耳語する時には、この半開の聲門で出來る音聲を用ゐるのである。聲俗潰のたにまれた。と云ふ時の音聲も、この半開の聲門の結果である。聲門の開閉を圖で顯せば、第四圖のやうになる。

第四圖　聲門の開閉



(一)は密閉せられて居る帶門を、(二)は其半開の樣を、(三)は其全く開かれて居る樣を示す。——は聲帶、‖は破裂軟骨、を知れ。また、環狀軟骨の雙層の間を表はして居るのである。

第一三話　喉頭腔とモルガニーの氏寶と

甲狀破裂軟骨を包んで聲門の上被を成してゐる粘膜は、こゝに終るのではなく、益〻上の方へ昇つて行くのであるが、聲門の直ぐ上には、斜に上に向つて走つてゐる二つの寶が左右にある。この寶はイタリヤのモルガニーと云ふ生理學者が發明したからと云つて、モルガニー氏寶と云ふ名前を有つ以てゐる。

前述の粘膜はこの竇の裡面を蔽ひながら尙一層上の方へ進んでゐる。

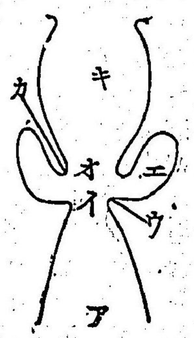
モルガニー氏竇の入口の下部は聲帶と水平を成してゐて、其上部は聲帶と相對して其上の方に位してゐる。この上の方の、やはり粘膜で覆はれてゐる、モルガニー氏竇の出口は、筋肉の作用で、ちやうど聲帶の互に近寄せられるやうに、左右から幾分か近寄せられ、そして氣息の通路を狹隘にする事が出來る。その全体の樣が、大に眞の聲帶に似てゐる處から、此部分を、通常偽聲帶と云ひ、其間の空虛を偽帶門と云ふ。偽聲門は眞聲門の如く密閉せられる事の出來ぬのは勿論、間を通る空氣をば、摩擦の音を生じる程にも、其扉を接近させる事も、出來ぬのである。

偽聲門の上部には喉頭腔と云ふ、割合に廣い部屋があるが、この部屋とモルガニー氏竇とは、眞の聲帶て出來た音聲に反響の室を備へ、其傳導に中々の力を添へる。

今、眞聲門と偽聲門の關係、及び喉頭腔とモルガニー氏竇との位置の大躰を示す爲に、左に縱斷圖を掲げる。

偽聲帶
偽聲門
喉頭腔

第五圖



ア、氣管の上部　オ、偽聲門
イ、眞聲門　カ、偽聲帶
ウ、眞聲帶　キ、喉頭腔
エ、モルガニー氏竇

第一四話　咽頭

聲門と云ふ關門を通り拔け、喉頭腔を過ぎると、息は、咽頭と云ふ四つ辻へ出る。善い鏡に向つて、成るべく大きく口を開けて、「アー」と發音しながら、口腔のつきあたりを見てごらん。舌の奥の方に當つて、俗に「喉ちんぽ」とも、ある地方では、「のどご」「のどびこ」などゝも云ふ、氷柱狀の肉の突起を中央にして、其の左右に、眼鏡橋を側面から見たやうな、二つの半圓形を成してゐる肉の籠が見える。この籠は、醫者のことばで、軟口蓋と云ふもので、上顎の續きであるが、この軟口蓋と、舌の奥との間の、狹い、峽を成してゐる處の裏手に、それよりすこし間をれいて、口のいきづまりの壁が見えるが、この壁が、茲に云ふ咽頭の中程で、そこからは、上の方には、鼻腔へ出る孔があり、横からは、今述べた通り、口へ通ふ路

咽頭
軟口蓋

があり、また下の方には、前述の氣管へ行く路と、食管へ行く路とがあるのだから、咽頭は、とりも直さず一つの四つ辻である。

咽頭は、既に四つ辻である以上は、そこにれちいる品物は、四つ辻に立つて居る人のやうに、四つ辻の方面の中、どれにでも向ふ事が出來るはずで、たとへば、肺臓から喉頭を經て、咽頭へ送り出された空氣にしても、其出て來た氣管へ逆戻りもせず、また、胃袋の方へ、食管を經て、通つて往かないにした處が、口へも往けるし、鼻へも出られる。試みに、たばこを吹ひ込んだ人を見てゐると、煙は、口から出される事もあり、鼻から出される事もあり、またこの兩方から同時に出される事もある。これても、咽頭の、諸方へ通じて居る辻だと云ふ事が分からう。また吾々が飲んだり、食つたりする食物や飲料に就て見ても、口の中を奥の方へ通り過ぎた後は、必ず胃の中へ往くとも限られてゐるのではない。時に依ると、氣管へ戸惑ひしたり、鼻へ迷ひこんだりしかける事がある。おほ急ぎで茶碗など掻きこむ時に、大層むせかへつて、鼻から、飯粒を飛び出させる事がある。これは、咽頭から食管へ往く飲食物が、謬つて氣管や鼻腔へはいつた

場合に於て、氣管から急に息を出して、喉頭腔の入口へ飲食物が來るや否や、直く之を吹き飛ばすからで、俗にむせかへると云ふは、この突き戻しの作用を云ふのだ。

咽頭が四つ辻である上は、この戸惑が絶にず起こるはずだが、其れては吾々が難儀で仕方がないから、それを防ぐ仕掛がちやんと出來てゐる。先づ下の方の喉腔の入口には一枚の蓋があつて、物を嚥み下す時には、其氣管へ迷ひこむ事を防ぐ爲に、上から下りて來て喉腔への通路を遮斷する。又常の呼吸の時、談話する時などは、其蓋は、高く上がつて、上端は、目ては直ちに見る事が出來ぬ、舌の奥のすこし下の方に上を指してゐる。この蓋の名は會厭で、前に話をした會厭軟骨が、其心にはいつてゐるのである。

また、上の方で、鼻と口との追分路の中央には、前述の軟口蓋と云ふ肉の簾が上から垂れてあるが、これは常の呼吸のをりの事で、物を嚥下する時には、軟口蓋が、例の喉子即ち學名は懸壅垂と云ふものを咽頭の壁に押しあてゝ、鼻腔への通路を斷ち切る。されば、氣管より出て來る息は口から出る外はないので、

また、口から咽頭へはいつて往く食物も、會厭が下してある場合には、食管へ押しやられる外はないのである。

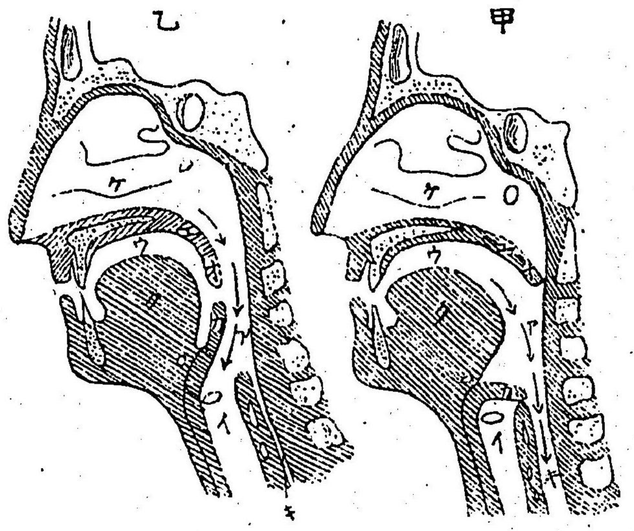
して見ると、軟口蓋は、筋の作用で釣り上げられたり、また釣り下られたりするのである、が、通例ン□の字で示されて居る鼻音と云ふ音聲を出す時の外、今日の東京語に於ては、談話の時は、いつも軟口蓋が、釣り上げられ、鼻腔への通路は、遮られてゐるものと見てよろしい。若しこの場合に、鼻腔への通り路の遮斷が嚴密でなく、少しでも息が其門扉の間から漏れると、音聲が、俗に謂ふ通り、鼻に、掛かるので、東北地方の人々や、關西では土佐、淡路あたりの人の言語に於ては、この鼻にかゝる響が著しく聞こえる。

今、これまで述べて來た事の、一層よく知れるやうに次に圖解を出すが、咽頭を示すものばかりでなく、これから追々に說いて行く口と鼻との樣子のわかるやうに、これらの部分の全躰の横斷面を掲げる事にした。

第六圖

甲は嚥下のをりの咽頭を示す

乙は常の呼吸のをりの咽頭を示す



ア、咽頭
イ、喉頭
ウ、口腔
エ、軟口蓋
オ、懸垂瓣
カ、會厭
キ、食管
ク、舌
ケ、鼻腔

第一五話　鼻腔

口腔と鼻腔とは、咽頭を互の落ちあふ溜り場所として、相通じて居る事は既に述べた通り、口から吸ひこんだ烟草の煙を、鼻の孔から出す事が出來るのでもわかるが、今かやうに鼻から吹き出される煙に附いて、鼻腔にはいつて見ると、鼻腔の構造は、中央は、軟骨製の縦の仕切のある一つの部屋で、床板は上顎骨を心にしてゐる、所謂上顎の天上裏である。この床板に添ひ、且つ例の仕切、即ち鼻中隔と稱へるものゝ一面に附いて前の方へ進んで行くと、鼻中隔軟骨の盡きる處の前の方に、左右に分れてゐる二つの孔がある。これが即ち、鼻の孔である。鼻孔を取り圍んでゐる小鼻は勿論、俗に謂ふ「鼻」は實は外鼻と稱へるもので、物の香を嗅ぎわけると云ふ、大切な機械の備へてあるのは、外鼻ではなく、其の奥の方、第六圖の中のケの字の書いてあるあたりにあるのである、其の樣はちやうど俗に耳と云ふものが外耳で、音を聞きわける本統の耳はずつと奥の方にあるのと同じだ。又俗に鼻の障子と云ふ事を云ふが、是は前述の鼻中隔の事を云ふのではない、寧ろ軟口蓋の作る、咽頭と鼻腔との中の襞の事、と見

る方が正しい。何となれば、前にも述べた通り、この襞の閉鎖が充分でないと、聲が鼻に掛るからだ。がしかし、聲が鼻にかゝるのは、軟口蓋の閉鎖に故障がある時ばかりには限らない。上顎のはづれに、病の爲に穴が開いて、口から出す息が鼻へ漏れる場合にも此事がある。

鼻腔の四壁はいづれも堅いし、其門には、開閉の出來る門扉のやうなものもなし、口腔の舌のやうに、其中を自由に動きまはる道具もないから、發音に際して、鼻のする役目は、咽頭腔同樣に、專ら他の處で出來た音聲に反響を與へて、之を大きくし、その傳道を掛けなどするに在るので、鼻の中ばかりで、特に拵へられる音聲は一向ない。

第一六話　口腔と唇と

鼻腔を、二階座敷に見立てれば、口腔は、即ち、その下座敷で、此上と下との座敷の堺、鼻から見れば床板、口から見れば天井板、にあたるものは、前にも一寸述べた通り、世に謂ふ上顎で、學名を口蓋と云ふものである。

喉の方から、口腔へ這入る道は、例の咽頭の四つ辻からするので、通例の呼吸

舌

の、時には、軟口蓋が垂れ下がつて居るから、鼻腔への通路は充分に開いてゐるけれど、口腔へのは、至つて狹く、氷柱のやうに垂れてゐる、中央の懸壅垂の左右に、軟口蓋の後緣が成してゐる、二つの弓形門を過ぎ、所謂咽峽を出ぬければ、茲が即ち口腔で、下には舌と云ふ柔軟な滿圍がある。上は例の口蓋で、其全躰は寺の本堂の天井につるしてある、天蓋と云ふ物に似寄りの形をしてゐる。

口腔の諸方面は、鼻腔のと違つて、種々雜多の運動を爲るから、口腔の形も亦いろ〳〵に變る。先づ、舌は、筋肉の厚き塊で、口中の底部を全く充塡してゐるものであるが、これには、其中にも外にも種々の筋が附いてゐて、我々の知つての通り、上下左右へ、殆ど自由自在に動かす事が出來るやうに成つてゐる。

舌の運動を掌る種々の筋の話は、今こゝで一々述べるわけにいかぬから、銳に對して其變轉の殆ど極まりない樣を、直々目擊して、筋の働の自由な事、其仕組の靈妙な事を充分に認めておいてほしい。が、いくら大きな口を開いても、舌の根本までは到底、たゝの仕方で見にるものでない。我々の眼に通例這入るのは舌の奥の高い處で、それから先は、下り坂に成つて後ろの方へこけてゐるが、適當の方法を以て、其後ろに探り入ると、前に述べた會厭の突き立つてゐる肉の棒と、相對してゐる部分即ち舌の根と會厭との谷あひに達する。舌の終極する處、即ち谷の底は、それ故舌の根元でもあり亦會厭の根元でもあるのだ。舌の會厭と對峙してゐる部分、及びそのすこし上の部分が、學名を舌根と云ふ處である。但し、佛法で云ふ舌根は、舌と云ふ六根中の一つの根と云ふ心で、舌の根元と云ふ意でないのだから、混じてはいかぬ。又、俗に云ふ舌の根と云ふものも茲に云ふ意と違ふから、これとも混同せぬが肝心である。

舌根と、銳で見る事の出來る舌の奥のはづれとの間に、柔軟な皮で蔽はれた、小い凹みがある。これは盲孔と云ふ處で、ドイツ語、フランス語、及びその他の外國語の中には、此の部分へ、懸壅垂の裡面を、輕く載せて、裡手から氣息をかけて、一種のラ行音を發する事がある。これは、役者が舞臺で使ふ事のまれにある位で、その外は、わが國語では全く用ゐない音である。

盲孔から前の方、舌の端、即ち舌尖までの全体の舌の表面は、肉眼を以て直接に見る事の出來る部分で、この部分を、今舌面と名づける。舌面を便宜の爲め

舌面の區別

三つに區別して、發音の際に使はれる部位を明かにするが、それは、前舌面、中舌面、後舌面の三つで、今、舌を尖らせて、口から外へ直線に突き出すと、舌の尖から約そ四分ばかりの處は、平坦で、堅くなつて居る。此部分が、前舌面で、それから、奥の五分ばかりの處は、幾分か凹形を成してゐる。これが中舌面。それから奥の、著しく隆起してゐる部分が、後舌面である。

通常の呼吸の時は、舌は下腭の内側に、齒の生へそろつた人に於ては、十六枚の齒と云ふ番人に取り圍まれてゐるのであつて、其下部、即ち底には、筋肉があるばかり、骨と云ふものは丸で無いから、下顎の裏面を外から押して見ると、唯ぶくぶくしてゐるにすぎぬ。喉の方への曲り角に、初めて舌骨の端が手に觸れる位なものだ。

齒の名稱

舌の番人と云つた、十六枚の齒は、その根を、蹄鐵形にしてゐる下顎骨に据ゑてゐるので、十六枚の中、前の四枚が門齒、その左右の二枚、即ち、俗に云ふ牙又は糸切齒が犬齒、またその左右の五枚づゝの大きな齒が臼齒である。臼齒の中に就いても、前の二枚づゝが小臼齒で、後ろの三枚づゝが大臼齒である。

上顎の有樣

下顎に、十六枚の齒がある通り、上顎にも亦十六枚の齒があつて、其名稱も、其配置も、全く下顎に於ける有樣と同じである。即ち、下の門齒は上の門齒と、下の犬齒は、上の犬齒と、下の臼齒は、上の臼齒と、各々相對してゐる。上の齒の根の据ゑつけてある座は、上顎骨と云ふ骨であるが、其形は、下顎骨のとは、大に違つてゐて、其骨は、下顎骨のやうに蹄鐵形をして居らぬ、試みに指頭を以て、上顎を、門齒の裡の齦の附け根から、次第に奥の方へ探り入ると、上顎は、著しく穹窿を成してゐて、ちやうど覆せた茶碗のやうに思はれる。然し、追々と奥の方へ這入つて、最後の左右の臼齒のはづれを經て、一本の線を、顎なりに引くと假に考へて、其線より奥へ探り入ると、指頭の感覺は大に違つて來る。今までは、石のやうな堅い物に觸れてゐたのに、今度は、一變して、丸でぐにゃ鞠の柔いのを押すやうな感じがし始める。これは、上顎骨がそこで盡きてしまふからで、それから先の部分には、骨の心が這入つてゐないから、至つて柔軟である。鏡に向つて大きな口を開くと、この柔軟な上顎の端が、肉で拵へた籠のやうに上から垂れ下がつてゐるのが善く見える。其中央の指の頭のやうな突起は、即ち懸

口蓋

齒槽突起

上顎の區別

懸垂に外ならぬ。

上顎の有樣は、大体かやうであるが、其全体は、前にも述べた通り、茶碗でも覆せたやうで、また、寺の本堂で見る天蓋のやうである處から、其學名を口蓋と云ふのだ。其中、上顎骨を心に入れてゐる部分、即ち、堅い部分を硬口蓋、その奥の柔い部分を軟口蓋と名づける。同じ上顎の中でも、齒の裡手の俗に齦と云ふ部分で、齒の根の宿つてゐる鞘の處は、別に齒槽突起と云ふ名を附けて、口蓋とは、區別を立てる。

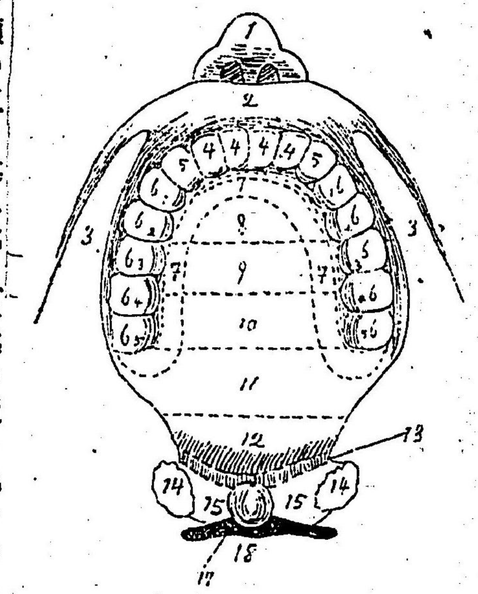
齒槽突起の中に就いては、特に左右の犬齒の間の部分に於て、齒の附け根の處と、其少し後ろの處と、又その後ろの處との三區域を設け、その一々に、前部、中部、後部の名稱を附けることが出來るが、硬口蓋に就いても同樣で、堅い顎の眞中、の、中央とも云ふべき部分に、指で撫でゝ見ると、幾分か隆起してゐる處がある。この部分を中部として、其前後の部分を其れぞれ前部又は後部硬口蓋と定める事が出來るのである。硬口蓋のはづれから、懸垂に至るまでの軟口蓋も、亦、二つに區分して、前部軟口蓋、後部軟口蓋と殆ど平分に分けておくと、發音の

上顎と下顎

說明をするのに色々な便利がある。

第七圖

口蓋の諸區域を示す



1、鼻。 2、上唇。 3、頰の横斷面。 4、門齒。 5、犬齒。 6、大小臼齒 7、前、中、後部齒槽突起。 8、前部硬口蓋。 9、中部硬口蓋。 10、後部硬口蓋。 11、前部軟口蓋。 12、後部軟口蓋。 13、前口蓋弓(軟口蓋が舌根と咽頭の壁とに向つて、二條の皺襞を成して、移行してゐる、弓の中の、前の方の皺襞がつくる弓形)。 14、扁桃腺(上述の二皺襞の間に在る腺)の横斷面。 15、口蓋窩(前後の口蓋弓の間に出來る凹面)。 16、懸垂。 17、咽頭腔。 18、咽の後壁。

上下の顎の互に違ふ處は、上述の通り色々あるが、最も著いのは、上顎は頭蓋骨と一連で、作りつけの、更に動く事の無いものであるけれど、下顎骨は、大に進つて、筋肉の作用に依つて、任意に上げたり下げたりする事が出來る。隨つて舌や唇の位置と形とに大なる關係をおし及ぼすのである。

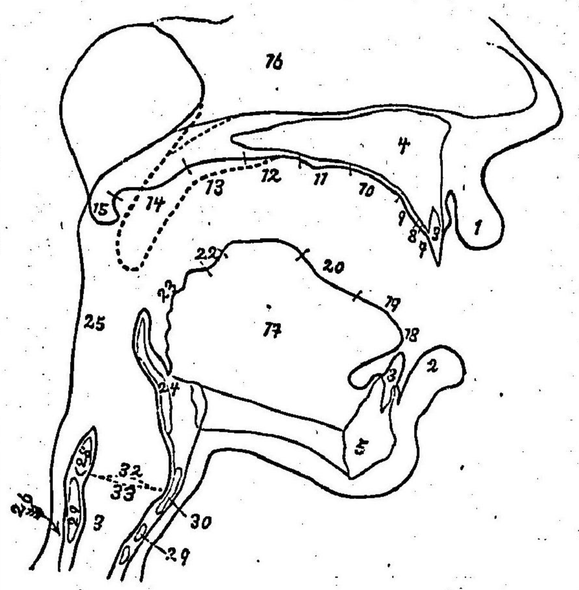
唇の運動

口を開いてゐる時には、其上下の防ぎは、上下の顎であるが、其左右では、頰の外から、肉の厚い切れで、柔かに包んでゐる頰が、即ち其外壁で、この壁の續きで、鼻の下と顎との間にある、横一文字の裂けめが、誰も承知の口で、その縁が、唇。即ち「くちべり」、兩の唇の隅が所謂口角である。唇にも、舌に於てのやうに、色々の筋があつて、我々が絶にず見る通り、殆ど轉輾極まりない程の運動をする。その運動の中の重なるものを云へば、擴張、即ち、開げ擴げる事で、この運動は下顎を引き下げる事に伴ふのが常である。次は、收閉、即ち、結び合せる事、今一つは、突伸、即ち尖らせる事で、この最後の運動は、通例第二の收閉の運動に伴ふ。頰は、先に話した通り、元々、唇と一と續きの肉片から出來てゐるのだから、唇の運動には自然參與するわけで、固より下顎の運動とは、極めて親密な關係がある。のだ。それゆゑ、發音の事を調べやうと思ふ人は、單に唇の運動にばかりで無く、頰の動き方にも大に注目しなければならぬ。

こゝまで諄々と述べて來た處で、まづ發音の仕かけの大略は說いたわけであるが、大体誰が說いても隨分込みいつた話しにくい事がらなのだから、往々

說明の物足らぬ處もあつたらうが、それは、簡短を旨とする、かやうな書きものの上では、賊に致し方のない事である。其不充分な處を幾分か埋め合せる爲に、次に、口腔に就いて說いた事を、一目に知らせる圖をば、一つ、拵り出して掲げやう。

第八圖　口腔の諸部其他を示す縱斷面



1 上唇　2 下唇　3 門齒　4 上顎骨　5 下顎骨　6 口腔　7 前部　8 中部　9 後部（齒槽突起）　10 前部　11 中部　12 後部（硬口蓋）　13 前部　14 後部（軟口蓋）　15 懸垂垂　16 鼻腔　17 舌

18 舌尖　19 前部　20 中部　21 後部（舌面）　22 盲孔　23 舌根　24 會厭　25 咽頭　26 食管　27 喉頭腔　28 破裂軟骨筋　29 環狀軟骨　30 甲狀軟骨　31 氣管　32 偽聲帶　33 眞聲帶

音の調述

第一七話　音韻の分類

發音の際に使はれる道具だてのあらましは、一通りこれでわかつたとして、その次にすべき仕事は、其道具だてに依つて出來る品物、即、音韻の話である。

發音の原料は、概して吐く息である、といふ事は、既に度々述べたが、この吐く息を、そのまゝ躰内から外面へ出して仕舞つては、平生の呼吸と何の變りも無いわけだから、それをば前述の道具だてを用ゐて、種々樣々に着色して音にするので、肺臟から出て來る息の、第一の着色所は、喉笛と俗に云ふ、喉頭の中にある。この關門を通る息が、第四圖の(一)の樣に、閉ぢられてゐる聲門を無理に押しあけて通らうとするをり、聲帶の皺動を起こす時は、それが、たとへばアー、イー、ウーと云ふ樣な、着色せられた息、即、こゑとなる。但し、第四圖の(三)が示すやうに、打ち開けた聲門を、息が通る時は、通過の際に何の障害も受けないのだから、更に着色せられないので、やはり息のまゝ、それより上の、咽頭へ出て、或は鼻孔から、或は口腔から、又はこの二つから、躰外へ出るので、この場合の息をば話音、即、言語の材料として用ゐられる音響に變ずる爲には、之に色々の着色を、口腔の中と脣とで施すのである。

鼻にかゝる音の出來方

さうすると、肺臟から出て行く息が、咽頭に到達する前に、既に二種に分かれるので、一つはそのまゝ無色で咽頭に達し、今一つは、聲帶の皺動を受けて、着色せられて、咽頭に着く。これは、發音の研究上、大事の區別である。表で示せば

氣息 ⎧一、無色のもの。これを息といふ。
　　 ⎩二、帶色のもの。これを聲と云ふ。

となる。

息にしても、聲にしても、それが咽頭に達した上は、そこから躰外へ出る仕方に、三通りある。一つには、鼻から、二つには、口から、三つには、この二つの路から、で、常の呼吸のをりには、鼻と口とから、鼻八分、口二分位の割合で、息を出しいれしてをると云つて、差支なからう。また、息でなく、聲をば口と鼻とから、同時に出すと、東北の人の發音に於てのやうに、音が鼻に掛るので、この二つの場合では、氣息が、口と鼻との兩方から一時に漏れるのであるが、本邦の標準と立てられるの發音に就いて云ふと、其話音は、鼻又は口の片一方からばかり、送り出さ

れるのである。故に話音を分けて

談話音
一、口音、即、口からばかり、氣息を通じて作る音響
三、鼻音、即、鼻からばかり、氣息を通じて作る音響

とする事が出來る。

鼻腔の任務

この二種の中、鼻音は、舌と口蓋、又は上下の脣に依つて成される閉鎖の爲に、咽頭へ昇つて來る氣息が、垂れ下げてある懸壅垂の裡手を經て、鼻腔に入り込み、鼻腔には、既に述べた通り、之を遮り止めるに何の仕掛けも無い處から、そのまゝ鼻孔を通つて、外氣に接するので、鼻音を作る爲に鼻腔に送り込まれる氣息は、必ず帶色の者、即こゑに限るのである。これは、鼻腔には無色の氣息、即いきを變じて、談話音にする着色器が、何も無く、只、喉頭で出來たこゑをば、其廣い室の中で反響させて、形を大きくする能があるに過ぎないからだ。

次に、口音を作るには、軟口蓋を上げて、後ろの咽頭の壁に押し當て、氣息が、少しも鼻から脱けないやうにして、其全部を口から出すので、口音には種々の種類がある。其一つは、口腔内に、舌や口蓋で障害物を拵へず、又唇で氣息の出口を遮るやうな事もしないで、唯、喉頭で出來た「こゑ」の反響場としてのみ、口腔を使ふ場合でこの場合には、口腔は、あだかも鼻腔であるかのやうに用ゐられるのである。かやうに、口腔の中や唇で、氣息を遮り止めたり、または摩擦の音を出す事さへしない位に、氣息の通路をあけてれく時に、口腔の反響に依つて成り立つ話音が、世上に通例母韻と云ふもので、その、鼻音との差は、度合のちがひで、種類のちがひとは云ひきれない程のものである。それで、母韻もまた、鼻音同様に、例の着色せられた氣息、即「こゑ」でのみ成るのであると云ふ事は、等くおぼえておてほしい。

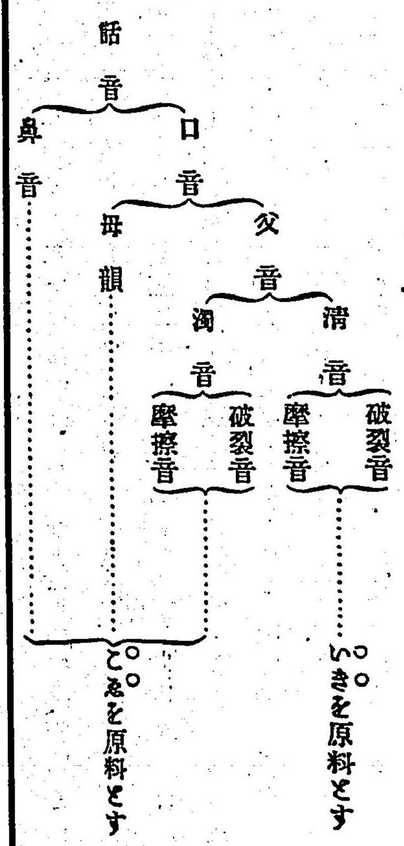
音韻

父音

口音の中で、母韻でないものを引きくるめて、世間では父音(又は子音)と云ふが、これは、鼻音や母韻と違つて、唯の反響音では無く、口を過ぎて躰外へ出ようとする氣息の爲に、之を喰ひ止める爲、兼て設けた、舌や唇を上げたり、合せたりして拵へてある通行止が、氣息の充分に押し寄せるのを俟つて、急に、打ち開けられ、その結果として聞こえる、物の破るやうな音響(これを破裂音と云ふ)か、又は、出て行く氣息の通行の邪魔をする爲に、やはり舌や唇で、いろいろの障害物

を横たへて、これがため、氣息が、上下左右の物に觸れて、一種の軋轢の音を生ずる、その結果として聞こえて來る、摩擦の音響（これを摩擦音と云ふ）か、二つの中一つを指すのである。且つ又、所謂父音を作る氣息は、鼻音や母韻を作るものの如く、必ず「こゑ」でなくとも善い、「いき」で作らるゝ父音もあるといふ點は、大に注意すべきである。ろして息で作られる父音が、所謂清音で。聲で作られる父音が、所謂濁音である。

これまでに述べた、音韻の區別を表に作つて示せば、左の如く成る。



清音
濁音

鼻音の三區別

第一八話　鼻音

これから、上に示した、鼻音、母韻、父音の一つびとつに就いて、話しをしよう。

まづ鼻音には、三つの種類がある。その一つは、上下の唇を、密に合せて、その隙から、氣息の漏れないやうにして、肺臓から上つて來る、聲帶の皺動を受けた空氣、即ち「こゑ」をば、垂れさげてある、軟口蓋の裡手を經て、鼻腔へ廻し、そこから、眸外へ放出するので、この際「こゑ」は鼻腔に反響を起こすは勿論、口腔の、割合に廣い空室にも響きをおこす。たとへば、

せんべい（煎餅）　けんぶつ（見物）　へんぱう（返報）

などのんの音で、この音を發する時は、舌は、常の呼吸のをりのやうに、平垣の位置にある。

鼻音の第二種は、前舌面の蹄鐵形の線をば、齒槽突起に押しあて、氣息の漏れないやうにして、第一の場合と同じやうに「こゑ」を鼻腔へ廻はすのである。この鼻音は、口腔で反響する事は、第一種のと、違いはないが、只反響室の樣子が前のと、大に異つてゐるから、結果として顯れる音も、違つた感じを耳に與へるの

である。たとへば、

せん[illegible]にん(仙人)　こん[illegible]ねん(今年)　だん[illegible]とき(斷食)

に於けるん[illegible]の類が、即ち、この種の鼻音だ。

今一つの鼻音は、後舌面の中程を、高く隆起させて、軟口蓋の中程に押しあて、氣息の通路を密閉して、「こゑ」を鼻から漏らすと出來る。このをりには、「こゑ」の反響室は、殆ど全く鼻腔に限られて、口腔は先づまるで與る事がない程だから、その點に於て、此音の形は前の二つとは大に違つた印象を、耳の上に生ずるわけである、この類の鼻音は、たとへば、

だん[illegible]ご(團子)　なん[illegible]ぎ(難儀)　くわん[illegible]けい(關係)

などに於て聽くん[illegible]を云ふに外ならぬ。

さうすれば、鼻音に付いては、唇を用ゐて作るもの、前舌面を用ゐて作るもの、軟口蓋を使つて作るもの、この三種があるわけだが、此外にも、尙種々の鼻音が、口腔を通り拔けやうとする氣息の止め方に隨つて、出來得るし、ある外國語では、現に作つて話に用ゐてゐるけれど、我が日本語の常式の發音には、この三種

だけで、一通り事が足りるから、其他の鼻音は、姑く說かずにおく。

鼻音の三種の區別は、夙に知れてゐて、韻鏡の學者は、之を三內と云ふ。即ち、唇內、舌內、喉內の三音を云ふので、玆に喉と云ふのは、軟口蓋の事と見ると分かりがが善いのだ。

また我が國では、三種の別々の鼻息を示すのに、唯一つのん[illegible]の字を以てする、今日の定めであるが、それは實際の便利には反つて善いであらう。が、學問上の說明には、何とか一定の記號を用ゐて、一々書きわける事の出來るやうにしておきたいものだ。たとへば、舌唇內鼻音(ローマ字はn)をヌ[illegible]、唇內鼻音(ローマ字はm)をム[illegible]、喉內鼻音(ローマ字はŋ)をヌ[illegible]と定めたら、どうであらう。ム[illegible]やヌ[illegible]に付いてゐる三日月形の標は、其字が示す音の中から、母韻を除くと云意味でつけたものである。

因に云ふ。古く日本に傳へられた、所謂漢音、呉音のいづれに於ても、三內音が音尾に存してゐて、詩韻に就いて云はうなら、上平聲の中で、

一東　二冬　三江

下平聲の中で

七陽　八庚　九青　十蒸

上聲の中で

一董　二腫　三講　廿二養　廿三梗

去聲の中で

一送　二宋　三絳　廿三漾　廿四敬　廿五徑

など云ふ諸韻に屬する語は、皆喉内音、即ち〆で終つたのだし、また上平聲の中で

十一眞　十二文　十三元　十四寒　十五刪

下平聲の中で

一先

上聲の中で

十一軫　十二吻　十三阮　十四旱　十五潸　十六銑

去聲の中で

四寘　十二震　十三問　十四願　十五翰　十六諫

十七霰

など云ふ諸韻に屬する語は、皆舌内音、即ちヌで終つたのだし、また平聲の中で

十二侵　十三覃　十四鹽　十五咸

上聲の中で

廿六寢　廿七感　廿八琰　廿九豏

去聲の中で

廿七沁　廿八勘　廿九豔　三十陷

など云ふ諸韻に屬する語は、皆唇内音、即ちム で終つたのである。初め傳へられた時のンで終る字音に、この三通りの區別があつたと云ふ事は、

サガミ（相模）　の　サガ　を　相
オタギ（愛宕）　の　タギ　を　岩（原音ク を以て終る）
シグレ（鐘馗）　の　シグ　を　鐘

を以て示す事、

ナニハ（難波）のナニを難
ミヌメ（敏馬）のミヌを敏（原音ヌを以て終る）

を以て示す事、

アソビケム（遊興）のケムを兼
イナミツマ（印南都麻）のナミを南（原音ムを以て終る）

を以て示す事、などに依りても、其一斑を知るに足る。

處が、この三つの各別の音をば、假字に寫す時に、ゥに對しては、別に字を設けずに、或時はイ又ある時はウと云ふ、母韻を示す假字を以て、これと性質の善く似てゐるゥをは、兼ねて示させる事にした。それゆゑゥ音で終る明平清の類の音は、漢音と云ふ方では、ヤウ、ヤウ、ジャウと書かれたのである。その内に、このウ又はイの兼務のゥ音を示すと云ふ大切な事は、追々忘れられて、イとウもゥとは發音されずに、常の通りイウと云ふやうに發音されるやうに成つて、今日に達したのである。

偖また、唇内音と舌内音とは、前に述べた通り、初めは能く區別して、唇内音の

方をミ又はムで、舌内音の方をニ又はヌで書き示したが、後には、唇内音を用ゐる事は、追々に嫌はれ、現在の鹿兒島、其他の九州地方の人士が、カミ（紙）をカゥ又はカヌと發するやうに、之を舌内音又は喉内音で示すやうに成つて來た。それと同時に、ム、も又ヌも共にん文字で一樣に書かれるやうに成つた。この変で近代まで來た處が、本居宣長翁が出て、喉音は我が國語に於ては、後世の發達に係るもので、中古以上の、其所謂雅美なる我が國語には無かつたと信ぜられ、又後世んの字を以て書く發音の中に、古くは、むと書かれたものがあると云ふ事に氣付かれ、そこで直ちに、後世んと書く音は昔は皆むであつたと、斷まつた三段論法を用ゐられた。その結果が即ち安永の初めに世に出た『字音假字用格』に、特色の一つとして擧げてある、ヌ、のム、に混合せられてゐる、せん方なき誤謬に外ならぬ。そこで、この悲むべき事實は、他の學者に依つて、早くから見いだされ、充分に說き直されたが、この事に關係の事實を調べようと思ふ讀者は、太田全齋の漢呉音圖、僧義門の男信、白井寛蔭の音韻假字用例などを、讀みあちあふがよろしい。

第十九話　母韻

母韻と鼻音の異同

母韻は、口音であると云ふ點に於て、主に鼻音から區別せられるが、その他の點に於ては、餘程鼻音と似てゐる。即ち、兩者とも、「こゑ」を以て其原料としてゐる。また兩者とも、この原料を、鼻腔又は口腔に於て反響をさせて、其特性を帶びさせるに止まつて、別に之をば一變して、或は、摩擦を加へたり、或は、兼て設けてある舌や唇の障壁を押し破らせて、破裂の響を帶びさせたりなどする事は、更にない。

母韻の出來かた

母韻、即ち我が國の標準と見られてゐる發音に、就いて云ふ通例の母韻は口音であつて、其發音の際には、鼻からは少しも氣息が漏れては成らぬのであるから、之を作るには、例の軟口蓋と云ふ肉の簾をば、咽頭の裡手の壁へおしあて、鼻腔への通路を、先づ嚮め密閉しておく。さうすれば、氣息は、いやでも應でも、口腔の方へ、れし上つて來る。この時に於ての聲門から、唇までの距離と形狀とは、同じ「こゑ」をば、或はアに、或はイに、或はウに、その外各種の母韻に仕立てるので、我が國の、通常の母韻、即ち、ア、イ、ウ、エ、オに就いて述べて、見ようなら、先づア

と云ふ母韻は、第八圖に示してあるやうに、口を割合に大きく開いて、舌を先づは平坦にして、「こゑ」を發すれば出來るのである。この、アを作る時の舌の位置は、大体に於て平らかで、唇も無理につぼめられもせず、強ひて牽き張られてもをらず、いづれも、母韻を發する時の、舌と唇との中庸の姿と見做す事が出來るから、これをば、假に常位の母韻と定める。

アを發する時の樣は、右に述べた通りで、このをりは、舌は如何なる部分も、更に上顎に觸れないが、他の母韻を發する場合には、さうは往かぬ。

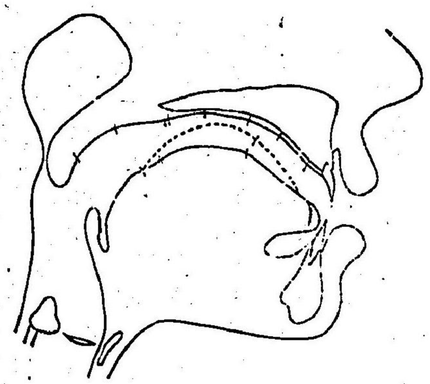
イを發する時には、ア韻の時とは違つて、顎角(＝上顎と下顎との角度)を狹くして中舌面の後の部分は、中部硬口蓋に向つて、著しく隆起させられ、前舌面の左右の緣と、中部舌面とは、中央に少しの空洞を餘して、左右の齒槽突起と、中部及び後部の硬口蓋に密接させられる。それ故、口の開き方は、アの時より較べ狹いが、唇の形は、所謂口角をば、左右同時に外方へ向つて引き下げやうとする傾があるので、アのとは同じくない。

ウの發し方は、やはり顎角を狹くするはするが、中舌面ではなく、後舌面の

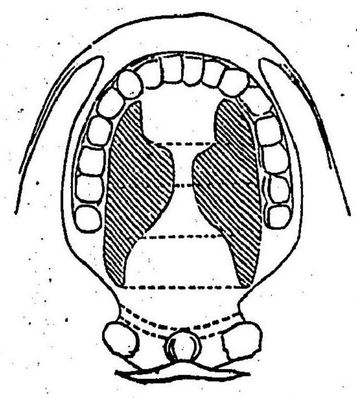
中程が、前部軟口蓋に向つて、著く上げられ、其中央に、狹い空洞を殘して、其左右は、緣もろとも、前部軟口蓋の左右側に着けられるのだ。口の開き方は、イ韻同樣にアの時より狹いが、唇の形は、イのとは異なつて、口角に殆ど何の變化をもかうむらず、また唇の尖らせられる事もない。但し、これは本邦のウに就いて云ふので、英、佛、獨などのウは、唇に大なる變化を起こし、口角は左右から寄せられ、唇は自然尖らせられて、俗に謂ふ、ふれつぼぐちの形狀を呈する。

第九圖　イの發し方。

(一)は舌の上がり方を示し、(二)は其あたり處を示す、



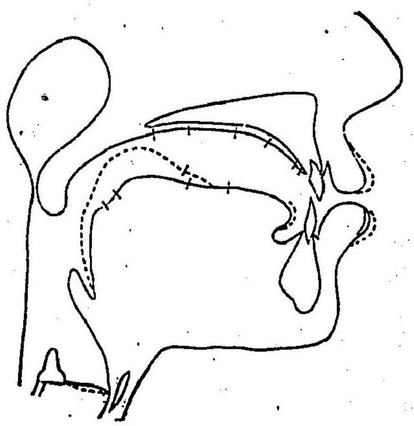
(一)



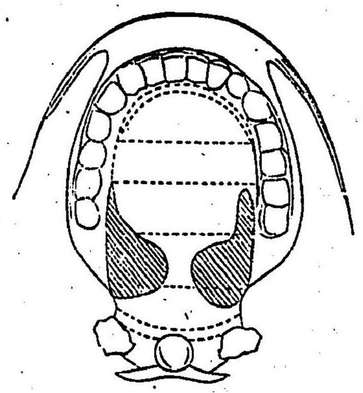
(二)

第十圖　ウの發し方。

(一)(二)は同上。點線は第九圖に於けるが如く、局部に力をこめての發音方を示す。(後段、音の廣狹の條參照)



(一)



(二)

母韻と父音の界

これで觀ると、舌は、イに於ても、ウに於ても、高く上げられるのであつて、唇は稍アより狹く開かれるのであるから、自然「こゑ」の通路が、甚だ狹められる事は、勿論の事實であるが、いくら狹い處を通るにしても通行の「こゑ」が、爲に、軋むに至つてはならぬので、若し軋んで、摩察の音が著くなると、ウもイも最早母韻ではなく、父音になるのだと云ふ事は忘れてはならぬ。

ア[illegible]、イ[illegible]、ウ[illegible]の外の韻母の、エ[illegible]とオ[illegible]は、ア[illegible]とイ[illegible]又ア[illegible]とウ[illegible]との間の韻で、即ち、ア[illegible]とイ[illegible]の間にエ[illegible]が出來、ア[illegible]とウ[illegible]との間にオ[illegible]が出來る。概して言つて見れば、イ[illegible]を發音しながら、顎角を開いて舌の隆起の度を段々にゆるめ、同時に口角を下に引く事を幾分か減ずれば、いつしかエ[illegible]韻が顯はれ、またウ[illegible]を發しながら、同樣の方法で舌を追々低くすれば、いつとなく、オ[illegible]が出來る。

さうすれば、エ[illegible]もオ[illegible]も共に一種の中間音であるが、中間音はエ[illegible]とオ[illegible]とに限られる筈はない。常の日本語には、全く出て來ないと云つてもよい音ではあるが、舌をイ[illegible]の位置におきながら、唇をウ[illegible]の位置におけば、イ[illegible]ともウ[illegible]ともつかぬ一種の間音が出て來る。即ちドイツ語のü の音である。また舌をオ[illegible]の處に据、えて、唇の形をエ[illegible]の時のやうにすれば、ドイツ語のö の音があらはれる。又之と正反對で、舌をウ[illegible]の處におき、唇をイ[illegible]の處において發音すれば、韓語のQ字が示す音が出るし、舌をオ[illegible]の位に据えて、唇をエ[illegible]にして發音すれば、これも韓語のㅚ字の示す音が出る。これらは、いづれも皆一種の間音である。又我が國の東北地方には、中央語に知られない色々の音がある中に、ア[illegible]ともつかず、エ[illegible]とも、

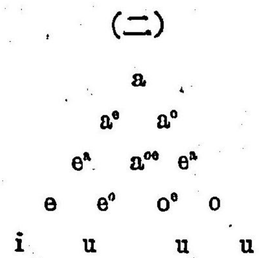
つかず、つまりこの二つの音の間音で、英語の The man has a hat などのa文字が示す發音がある。實にかやうな間音は、理論上から云へば、全く數限りのないものである。

それで、母韻には色々の種類はあるが、つまり

(一) ア[illegible]……ウ[illegible]。(二) ウ[illegible]……イ[illegible]。(三) イ[illegible]……ア[illegible]

の三つの、基底線とも云ふべきものから、成つてゐると云ふ事を考へて、この三つの線を、等邊の三角形に作つて見た人がある。それは、ヘルヴァーグ (Hellwag) と云ふ人で、西暦一七八〇年中の事であるが、後に、ブリューケ (Brücke) が、この三角式の母韻配列法を大成した。

(一)

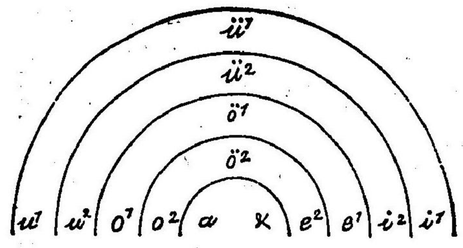


(Hellwag の配列)

(二)

(Brücke の配列)

しかし、この三角式を批難して、ア、イ、ウの相互の關係は、等しいものではなく、アはイとウとの間の、一種の中間音であるから、之を等邊の三角形に仕立てるのは悪い、ウ＝ア＝イ、又はイ＝ア＝ウと云ふやうな、同一直線上にあるものと考へべきのである。また ö 又 ü は上述の直線の上に成る音の二つが混化して出來たものであるから、是は、其直線に對して、垂直に置かれべきである、と説いた人もある。それはヴインテレル (Winteler) と云ふ學者で、其人の式は、第十一圖の示す通りである



第十一圖

この母韻配列法は、水平線の左右に列べてある音の、混化に依つて出來るものを示す爲に、半球の線を劃く、其結果が、波紋を成すから、波紋式と云つてもよし、また、配列の神髓は、水平線に對する垂直線で成るのだから、上の字の古字を採り用ゐて、上字式と名づけてもよい。また、o、u、e、i、等の肩に、

付けてある指數は、1は、口角を寄せるもの、2は、口角を開くものと云ふ意味で、又 & 字はエとアとの間音と心得れば、先づひどい違いはない。

三角式も、上字式も、共に母韻の音響の類似の度を基として建てた配列法であるが、この二つとは違つて、發音の際の、舌唇等の形狀を基礎として設けた、母韻の配列法がある。是は、生國は、イギリス生のメルヴイル、ベル (Melville Bell) と云ふ人が、初めて之を唱へて、同國人のヘンリ、スウイト (Henry Sweet) 氏が、多少は説を異にしてゐる處もあるけれど、大旨に於て贊成して、自分の音韻學上の説明に用ゐてゐる式で、其配列法の大要を話して見れば、舌の運動と唇の運動とを、これまでのやうに一緒に合せて述べずに、一々別に説き、舌の運動に就いては、(一)横(即ち前後)の運動と、(二)縱(即ち上下)の運動とを區別し、また唇の運動に就いては、(一)擴張の運動と(二)收閉の運動とを分けてゐる。この式に於ては、舌の作用に、尙又廣狹の別を建てる。其説く所に隨へば、廣音に於ては、舌は、その位置の高低又は上下に係らず、安らかに伸びた姿でゐるが、狹音に於ては、舌の中で、今作らうと云ふ發音(假へばイならイ、ウならウ)の出來る部分が、他の部分より

著しく凝つて、隆起する。隨つて、氣流の道路が廣音を發する時より狹くなる。そ

開

廣			狹		
前	央	後	前	央	後
上前廣開	上央廣開	上後廣開	上前狹開	上央狹開	上後狹開
中前廣開	中央廣開	中後廣開	中前狹開	中央狹開	中後狹開
下前廣開	下央廣開	下後廣開	下前狹開	下央狹開	下後狹開

上 中 下

合

廣			狹		
前	央	後	前	央	後
上前廣合	上央廣合	上後廣合	上前狹合	上央狹合	上後狹合
中前廣合	中央廣合	中後廣合	中前狹合	中央狹合	中後狹合
下前廣合	下央廣合	下後廣合	下前狹合	下央狹合	下後狹合

上 中 下

れ故一つを廣音と云ひ、今一つを狹音と云ふとかう說く。要するに、この式では、母韻をば、唇の開合(=擴張又は收閉)で二分し、その一つづゝを、初めに舌の廣狹で分け、その分けたものをば、更にまた、舌の高低(上中下)と、前後(前央後)との二つに依つて分類するので、表にして示せば前に示した通りになる。

この表の中で、前後とあるのは、唇の方を前と云ひ、喉の方を後と云ふので、この式では、囲形の割り方を其骨子とするのであるから、今假に、この配列法をば囲字式と名づけよう。

試みに、わがアイウエオの五韻をば、この囲字式に當てはめて見ようなら、アは『中、前、廣、開』の升に、イは『上、前、廣、開』の升に、ウは『上、後、廣、合』の升に、エは『中、前、廣、開』の升に、オは『中、後、廣、合』の升に、いづれも這入るべきである。さうすると、日本の母韻には丸で狹音が無いやうだが、實際はあるので、常の場合には、廣音を使ふ習はしに成つてゐるが、力をこめて物を言ふ時などの、ア、イ、ウ、エ、オには、往々狹音が用ゐられる。この式の事を知らうと思ふ者は伊澤修二氏著の『視話法』を一讀するがよろしい。

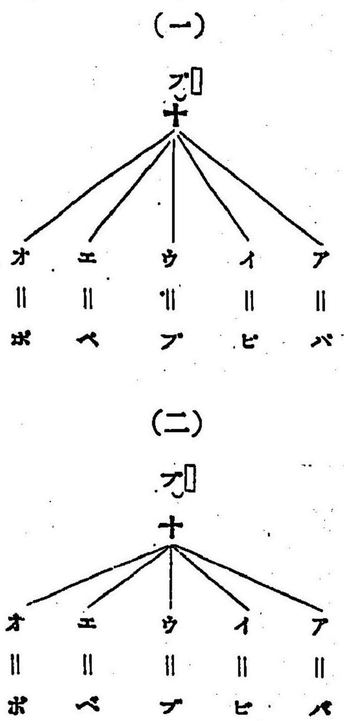
母韻の話は、この位に止めて、父音の説明に移らう。

第二十話　父音の中破裂音

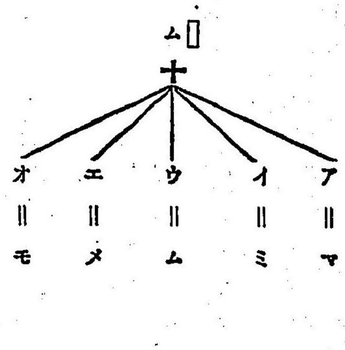
父音には、清音と濁音とあるが、その區別は、唇や舌の離合の具あひで定まるのではなく、原料として用ゐる氣息が、「いき」であるか、「こゑ」であるかに由つて極まるのだから、清濁を別々に分けずに、舌唇の働を基として説くが、反つてわかり易かちう。

清濁の別

鼻音には、三内と云つて、三種の別ある事は、既に話したが、其三内の中の唇内音を出す時のやうに、舌を常位に措いて、唇で、口腔から出やうとする氣息を喉ひ止め、これと同時に、軟口蓋を擧げて、鼻腔への氣息の通り路を密閉すると、どうなるか。下から昇つて來る氣息は、口腔の中に充滿して、其外壁即ち頰の内側を、頰に押す。この時、頰の兩側の筋肉に力を入れて、ぴつたり頰へ引き當てゝおけば、内面の空氣は主に頰の前面の裂けめ、即ち、唇に向つて押し寄せる。押し寄せる空氣をば、しかと支へて、暫時の後、今まで固く緘ぢてゐた上下の唇を、急に明け放つと、塞かれあぐんだ氣息は、一度にどつと迸る。其際一種の爆豆の撥る時のやうな、破裂の響が生ずるが、この破裂の音を「いき」で出せば、清音のプ（パ行の基音、ローマ字はp）が出來、「こゑ」で出せば、濁音のブ（バ行の基音、ローマ字はb）が出來る。即ち、このプ又はブに、アイウエオを加へれば、

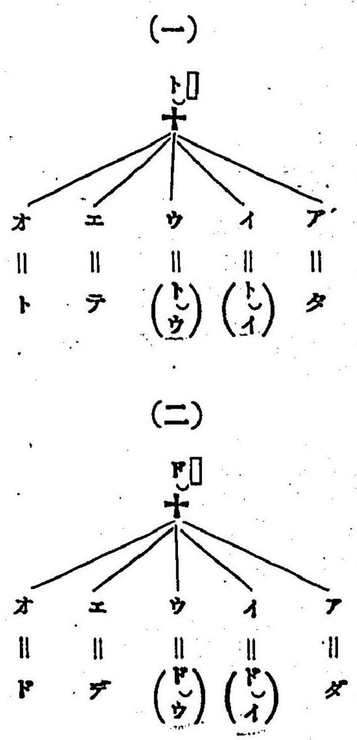


と成る。この二つを、前に述べた、鼻音の中の、唇内音の發し方とくらべて見ると、口音と鼻音との關係が、よく知れよう。即ち、



これが、唇内鼻音のム□に、アイウエオを配當した圖である。

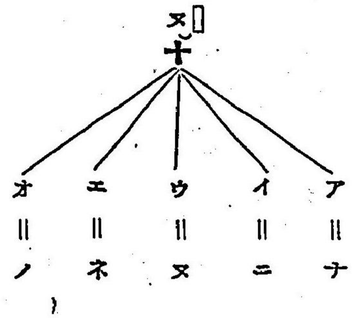
次に、鼻音の中、舌内音を拵へながら、軟口蓋を擧げて、鼻腔への氣息の通路を閉鎖して、押し寄せて來る氣息を舌の前方で暫く支へて、ヅ□又はヂ□の場合のやうに、急に障壁を徹去すると、この時も亦、一種の破裂の音が出來る。其音を「いき」で作れば、清音のト□(タ行の基音、ローマ字はt)が出來、「とを」で作れば、濁音のド□(ダ行の基音、ローマ字はd)が出來る。ト□とド□とに五母韻を配當すれば次のやうに成る。



ト□にイ□又はウ□を加へると、チ□かツ□になり、ド□にイ□又はウ□を加へるとヂ□かヅ□になるとと、俗には考へるが、實はそうでない。チ□はト□＋シ□＋イ□の合音、ツ□はト□＋ス□＋ウ□の合音、ヂ□はド□＋ジ□＋イ□の合音、ヅ□はド□＋ズ□＋ウ□の合音であるから、シ□ス□ジ□ズ□など云ふ異分子を含んでゐる點に於て、互に違うてゐる。決して混同しては成らぬ。ト□イ□ト□ウ□ド□イ□ド□ウ□の音は、昔は確に廣く用ゐられてゐたのであらうし、今も一二の方言には、其遺響を止めてゐるが、現在では、東京語を初め、大概の方言に用ゐられなくなつた。隨つてこれを示す特別の文字は、今は一向に

ない。

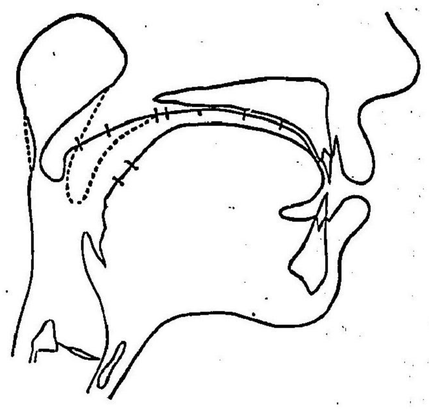
今比較の爲に、既に說いた、舌內鼻音のヌに母韻五個を配合したものを次に掲げやう。



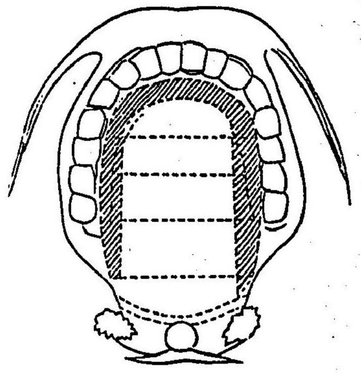
次の圖は、トとドとヌの發音の際の口の樣と舌の當り處を示す。點線は、ヌの發音。

第十二圖

(一)

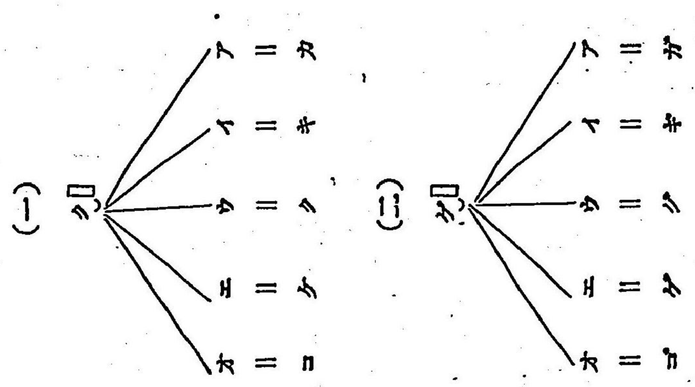


(二)

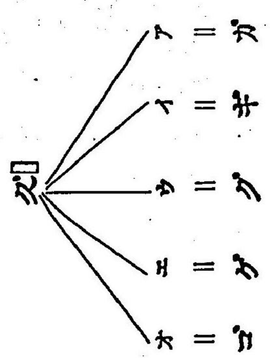


鼻音の中の、喉內音のグを發しながら、軟口蓋を以て、鼻腔への氣息の通行を遮斷すれば、氣息は口腔から出ようとする。その時すこし支へて、急に堰を開け放てば、茲にも亦た一種の、物の裂けるやうな音が出來る。この音をば、「いき」で拵へれば、その結果は、清音のク(カ行の基音、ローマ字はk)であるし、「こゑ」で作れば、其結果は、濁音のグ(ガ行の基音、ローマ字はg)である。この二つに、五つの

母韻を組み合せれば、



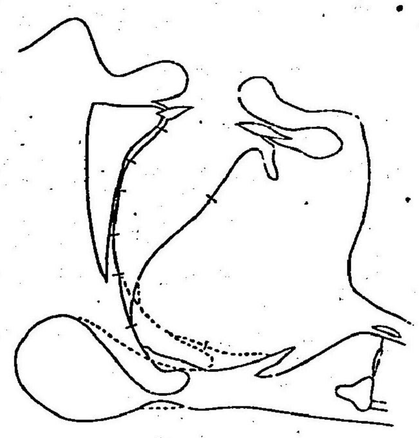
となる。これに對する母音のグに、比較の爲、五つの母韻を配合して次に示す。

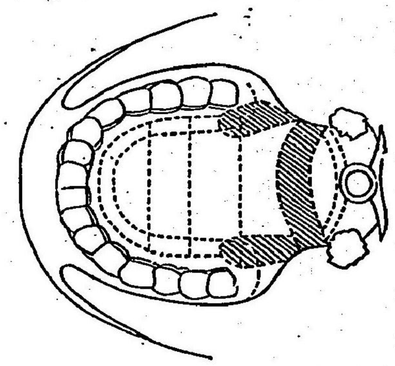


こゝにガ、キ、ク、ケ、コとしたのは、東京語などでは、一語の初發の音としては、殆どつかはぬが、其他の場合に於てはガ、キ、グ、ゲ、ゴに換へて、盛んに用ゐるものだ。たとへば、ゴ(午後)カ、ガ(我)カ、ク(影)などのゴ、ガ、クの東京人の發音である。この音は九州人には知られぬもので、東京人なども、口では、たとへばガとカとを明かに言ひわけるが、之を書き示す特別の文字を以てゐない。依て今、區別の爲に、濁點の代りに○を添へてカ行を示す文字から之を推ふる事にした。

クとグとクとグとの關係を圖で示すと、次の通りに成る。

第三十圖





今まで說いて來た處で見ると、鼻音の三內と、プ、ブ、ト、ド、ク、グ、六箇三組の口音との間には構成の上に著しい似寄りのある事がわかる。これを引きくるめて表にして示せば、相互の關係は次の通りになる。

○ 口音 清…プ　ト…　ク
　　濁…ブ　ド…　グ
　　喉　舌　唇
　　△
○ 鼻音……ム　ヌ　ン

△は音を作る作用に由つての區別。

○は音の通路に由つての區別。

茲に一つ大に注意を要する事がある。それは外でもなく、鼻音はいづれも母韻同樣に肺臟から送り出す氣息の續かん限りはいつまでも連續して發音し得られる音聲であるけれど、プ、ブ、ト、ド、ク、グ、の六箇三組の音に於ては、さうは行かぬ。本來舌唇等で作つてある障壁をば氣流で押し破つて拵へるものだから、自然連續的に發する事は出來ぬ。發音のたびごとに一度一度斷絕してしまうたとへば、

(一) ヲ ————————
(二) ヌ ————————
(三) ン…ン…ン…ン…

のやうになる。それ故、唇音のやうに、連續して發音の出來るものを續音と云ひ、クッ、トッ、プッのやうに、一度限り斷絶して、一線に引き延べる事の成らぬ音を、斷音と呼ぶと云ふ。音の斷續の區別である。

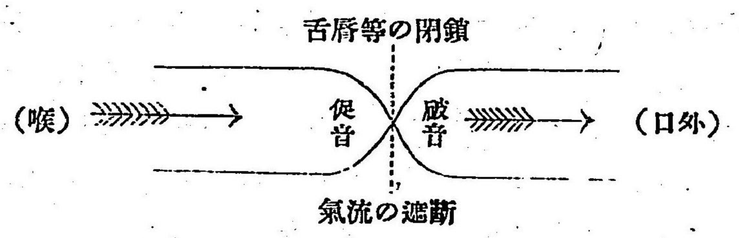
第三十話　促音

斷音の話をするにつけて、一寸觸れておきたいのは、促音と云ふものゝ事で、促音と云ふのは、たとへば、

(一)カッパン(活版)　ラッパ(喇叭)
(二)コットウ(骨董)　モットモ(最)
(三)トッカン(吶喊)　ガッカウ(學校)

に於ける、ッの音のやうなものを云ふのであるが、これは、斷音のプッ、トッ、クッを作る時の通りに、(一)唇と唇、(二)前舌面と齒槽突起、(三)後舌面と軟口蓋、の三つの中、一つを密に合せ、其密閉に依つて發音を急激に遮斷し、一時音聲の歇止を起こす、その歇止を指して云ふ名目である。これで、促音と斷音との差は、前者は、舌唇等の閉鎖を設けて、既に發しかけてある音聲を、急激に歇止させるが爲に出來、後者は、舌唇等の閉鎖の、既に設けられてあるものを、急激に開放して、其以後の發音に破裂の音聲を帶びしめるのである。換言すれば、甲は、氣息の流れの遮斷を以て終り、乙は、其開放を以て始まるのである。圖で示さうなら、次の通りになる。

第四十圖



破音と促音との關係は、かやうであつて、促音にも亦、破裂音同樣に三種の別がある。即、唇のみで作る促音、前舌面と齒槽突起とで作る促音、後舌面と軟口蓋とで作る促音の三つであるが、そのいづれに於ても、促音の促音たる所は、音の歇止に在るのだから、之を一種の音と見做すはいかゝであらう。其名目の不當であるやうに、學問の上から云ふと、三種の促音をば、ちやうど三内を一つ

のン又はん文字で示すやうに、一つのッ又はつで示すのは、極めて不精確である。尤も實用の上には促音と云ふ名目同樣に、從來用ゐてゐるのだから、それでよいとしても、學問上の區別の爲には、何とか別々の符合で書き顯はす事の出來るやうにしてれきたいものだ。試に云はうなら、

(一)ラ゜ブバ(唇促音)　(二)モ゜ツトモ(舌促音)　(三)ガ゜クカウ(喉促音)

と云ふやうにブックの右の肩に゜標を加へる事にしてはどうか。又普通に用ゐる、促音の標のッ又はつにも、必ず右肩に゜標を附ける事にした方が、其儘書くよりは勿論よく、小形のッ又はつを、右に寄せて書く、或人々の用ゐてゐる方法より、躰裁上其他餘程宜しいと思ふ。

促音に就いては、今二つ三つ、曰ふべき事がある。東京語その外大概の日本の方言では、「いき」を以て作る促音のみを用ゐて、「こえ」を以ては、之を作らぬ、即、清音の促音はあるが、濁音の促音はない。しかるに、ある方言、たとへば鹿兒島語などでは、

(一)國防を　コ゜クバウ

(二)鐵道を　テ゜ツダウ

(三)職業を　シ゜ヨ゜クゲフ

と云ふやうに、ツ゜クを有つてゐる。

又、日本語では、私の知つてゐる限りでは、促音を以て終るべき語は一つもないが、ある國語に於ては、これがある。たとへば、親族語の、朝鮮語などには、盛んに存在してゐる。例、

(一)バ゜ナ(鼻)　(二)カ゜ッ(笠)　(三)ト゜ク(餅)

又所謂促音の中に、通例、

(一)コ゜スサウ(骨相)　シ゜ユ゜ッス井(出水)

(二)セ゜シシ゜ヤウ(殺生)　ヒ゜シシ゜ユ(匕首)

の゜ス又はシを組み入れるが、この二つは、音聲の默止を示すものではなく、一種の續音であつて、グッブなどとは、大に性質の違つたものである。この音は舌をス゜又はシ゜の位置に擧げて、其前にある音をば急激に、堰き止めやうとする爲、起こるので、そうする時に、先に云つた促音に、大に似寄つた結果が生ずる爲、通

俗には、やはり促音の一種と見做され、無差別にッ又はつを以て書きあらはされるのである。

第二二話　世に半濁音と謂ふものは一種の清音なり

断音の事、それに混同せられ易い、促音の事を、話すついでに、一言辨じておきたいのは、「半濁音」として、どの日本文典にも説いてある音の事である。この音に就いては、從來の説明に據ると、「清音にも非ず、濁音にもあらず、其中間に位する一種の半ば濁れる音を云ふ」と云ふ類の定義(?)が下してあるが、この定義とも云ふべきものゝ意味を知るためには、所謂清音と濁音と云ふものゝ定義を知らねばならぬ。然るに、これに對しては、通例「清音とは、清みて發する音なり」「濁音とは濁れる音を云ふ」などの氣樂な、愚にもつかぬ、釋解が加へてあるばかりだから、一向に判然せぬ。しかし、「カキクケコ」「サシスセソ」「タチツテト」の類を、清音と云ひ「ガギグゲゴ」「ザジズゼゾ」「ダヂヅデド」の類を濁音と云ふ處を見れば、清濁の分かちの、主要な點は、原料の氣息が「いき」であるか「こゑ」であるかに基いてゐると思はれる。若し果してさうならば、半濁と云ふは、聲帶の、半分のみ皷動する、所謂「さゝやき」の音を指さねばならぬ筈。しかるに、今日では「パピプペポ」を指して、半濁音と云ふから、をかしい。「パピプペポ」の基音はプ音で、これは既に述べた通り、鼻音のム[illegible]に對する、唇を以て作る、純粹の清破音で、其濁音は「バビブベボ」の基音ズ[illegible]である。要するに、プ[illegible]は、イギリス文字のpが示す音と、全く同じ音を指すので、pの發音には、聲帶の鼓動は、些も與らぬと云ふ事は、充分に知れてゐるのだから、それに對する、ブ[illegible]も亦、濁音でも「さゝやき」の音でもない事はあきらかだ。それならば、何故、プ[illegible]音を半濁音と云ふに至つたか。それには、それ〴〵理由がある。其理由のあらましをかいつまんで述べて見よう。

我國の、中古以前のことばには、正しくプ[illegible]の基音を有つてゐたと見えて、紀、記、萬葉に、

(一)波(播、破、絆、簸、皤、巴、伴、半、盤、薄、芳、方、泊、藐、八、房)
(二)比(卑、斐、悲、臂、肥、避、譬、辟、被、彼、秘、非、飛、必、賓、嬪)
(三)布(賦、不、敷、輔、赴、府、甫、浮、俯、符、副、粉、負、否)

(四)閉(幣、弊、蔽、陛、平、蔽、珮、背、俳、杯、沛、斃、飲、返、遍)

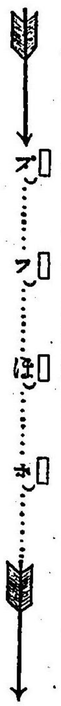
(五)富(保、朋、倍、本、菩、番、蕃、品、費、裏、褒、報、袍、譜、賓、抱)

など云ふ、假借の文字即假字で書きあらはしてある音があるが、この五つは、いづれも唐土の原音に於て、古より今日まで、明かにプ音を以て始まつてゐるものである。して見ると、我國の中古以前に、プ音があつた事が知れるが、今日の東北の諸地方、及び西南の諸州に、兩唇の間を、軋らして造る、プア、プイ、プウ、プエ、プオの音がある事、日本語の一つの方言でないにしても、之と賊に近い親族語には違ひない、琉球語にはフア行音で始まる語があるばかりでなく、其中の、所謂「さきしま」の土語にはパ行音で始まる語さへある事なども、餘程この事實を丈夫にする。尙又、フ音もか音これは後に說くも、有つてゐるアイヌ語に、必定日本語の傳はつたものと思はれる語で、しかもプ音で始まつてゐるものがいくつもあると云ふ事も、この事實をたしかめる者だ。

音聲が、假借の漢字で書き寫された時代が過きて、漢字から造り出された、片假字、平假字で示される時代に成つてからは、爰の波、比、布、閉、富は、ハヒフヘホ又は、ばはひふへほと書かれるやうに成つたが、かう成つた後も、其示す發音は、初めはパピプペポであつたらしく、その後、れひゐひと斷音が續音の方へ變つて、いつて、いつかフア、フイ、フウ、フエ、フオと發音されるに至つた。この樣で暫く續いたのであらうが、かうなつてもまだ、斷音續音の差違とそあれ、依然として唇音たる事は失はなかつたらしい。この事は、今のハヒフヘホの中、フが他の者と違つて、喉音でなく唇音であると云ふ事、併に、前に述べた地方のことばに、此處かしこフア、フイ、フウ、フエ、フオが遺つてゐると云ふ事で、想定される。

しかるに、中古以後、フア、フイ、フウ、フエ、フオも、次第に唇音の領分から追ひやられ、これを發する時の、必要な條件とも云ふべき、唇の働は、フの時の外、全く捨てられ、其代りに、後舌面を、軟口蓋に近く擧げて、氣息の通路を狹隘にして、其狹い路を、急きにせいて、氣流を通らせて造る、はひふへほが、用ゐられるやうになり、更に一轉して、今日の喉頭で作るハヒフヘホが使はれるに至つたのである。

さうすると、今日のハ行音の變遷は、



と、かう成るので、こう考へれば「ハヒフヘホ」に濁點を加へて「バビブベボ」を作るやうに成つた書き方の理由も明かに知れるが、若しハ行を、今日の發音の通り、主に喉音とすると、それを濁らせてバ行にすると云ふ所以がわからぬ。なぜと云へば、喉音のホを發しながら、いくら聲帶の鼓動を起こしたとて、決してブは出ぬのであるから。

古くは、ブ又はフの音があつて、「ハヒフヘホ」、「はひふへほ」は、之を示したと見ると、今日云ふ喉音のハ行、即「ハヒヘホ」の基音ホは、中古以前に無かつたのであるか、とかう云ふ問が起こる。これは重大な問題だが、要するに古くはホ音は、我々の祖先、特に夙く假字で書かれるやうに成つた當時の方言を用ゐてゐた人々には、全く使はれなかつた者らしい。其證は、「黄」「皇」等は、支那の原音は、いづれもホを以て始まつてゐるので、若し日本にホ音がゐり、今日の如く「ハヒヘホ」か、「ホア ホイ ホエ ホオ」を示してゐたのならば、其音を假字で書き寫す時、ハ行の文字を以て書き始めさうなものである。しかるに、所謂漢音では、之を「クワウ」、呉音では、之を「ワウ」と傳へてゐる。さすれば、ホの音を寫す、適當な假字がない處から、漢音に於ては、ホと同じく喉音のクを以て書き、呉音に於ては、全くこれを省いたものらしい。それ故、紀、記、萬葉の假字の中には、今日のハ行音を示すものが、更に見あたらぬ。

要するに、「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」「ブ、ア、ブ、イ、ブ、ウ、ブ、エ、ブ、オ」は古い音で、今日の「ハ、ヒ、(ホ)ウ、ヘ、ホ」の音は、比較的に、後世の發達に係るものだと云ふ事は、今日の學説として、殆ど動かないものだが、とにかく、この初めのブ音も、其一轉した形のフ音も、中古以下は、殆ど失せてホに採つて替られたものだから、後世の人はブやフの書の狀態を知らないで、之を疎隔し、之を輕蔑し、之を罵詈するに至つた。畢竟、今を賤み、古を尙ぶ、國學者の癖として、其の古音と、誤認した、ホ音を尊崇し、ホの後に、主に外國音の混合から起こつたと思ひちがひした、ズとブを、一も二もなく蔑視して、やれ「混濁不正の音」だの、「混雜紆曲の聲」だのと、罵りつくす。それが爲、今日まで「バビブベボ」と云ふ、一種の純然たる聲音を、半濁音と云ふに至つたのである。其名目に欺れて、讀者諸君も、私が、既にブを清音として擧げたのを奇怪に思はれはしまいかと、わざわざこの一ヶ條を加へたわけだ。こゝには、

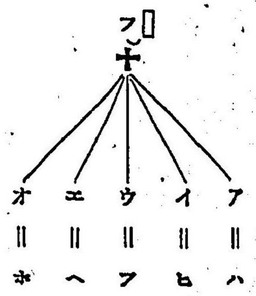
要旨だけを記したばかりだから、尙精細な事を知りたく思ふ人は、上田文學博士の『語學創見』の中の「P音考」(帝國文學第四卷第壹號)をごらん。

第二三話　摩擦音

音に、斷音と續音とがある事、母韻も鼻音も、共に續音である事、所謂父音の中で、ク(ド)プ(グ)ド)プ)は、いづれも斷續である事等は、一通り話したから、これから、父音の中の續音即摩擦音の事を語らう。

上下の唇を、ほとんど、全く閉ぢ切る程に合せ、其中央に瑣細な空隙を餘し、舌を休息の位置におき、軟口蓋を擧げて、鼻腔への通路を塞ぎ、その上で「いき」を急速に口腔から送り出すと、氣息は、脣の間を急き出される際に、左右の肉の壁に觸れて、一種の摩擦の音を起こす。「ふね(舟)」「ふだ(札)」「ふふく(不服)」などに於ける「ふ」の字の初發の聲が、即それだ。この音をフ[illegible]と定める。

前にも述べた通り、このフ[illegible]の音は、それより一段前のプ[illegible]音に亞いで顯れたもので、今の「ハヒフヘホ」の五文字は、古くは皆この音に母韻の組みあつたものを示したすなはち



と云ふ有樣であつたし、今も東北や西南の諸地方には、この五文字を、さう發音してゐる處があるのだが、中古以後は、フ[illegible]音は、「ウ」の前に來る時ばかり保存せられ、其他の場合に於ては、ホ[illegible]に轉化されると云ふ事が、今日の中央語以下大概の地方語の現狀である。それ故、ホ[illegible]を基音としてゐる「ハ、ヒ、ヘ、ホ」と、フ[illegible]を基音としてゐるフ[illegible]音とを、昔ながらに一行に書き列ねるのは、今日の中央語の音價で定めてある、五十音圖としては、正しくない、必二者を分離して、別行に配列すべきだ。

フ[illegible]を作る時は、「いき」を以てするのだから、フ[illegible]は勿論淸音であるが、これを「こゑ」で發した音、即、ブ[illegible]の濁音(今これをぶ[illegible]と書き示す)は、私の知つてゐる處では、日本

のいづこの地方語にも用ゐられてをらぬ。但し、琉球のさき島群島にはあるやうに思はれるが、琉球語は、日本語の一つの地方語として見るべきことばか、將た兄弟語と見べきものかの論のある今日だから、よしやぶの音がその國のことばにあるにしても、茲へ引きあひに出すのは、ちと躊躇せられる。

フの濁音は、見あたらぬが、これに酷だよく似てゐるのは、ヲ行の基音于で、その基音に、ア、イ、ウ、エ、オを配當すれば、

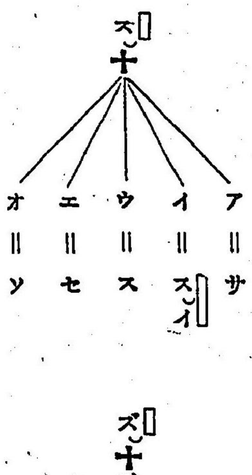
于十
- ア＝ヲ
- イ＝ヰ
- ウ＝于ウ
- エ＝ヱ
- オ＝ヲ

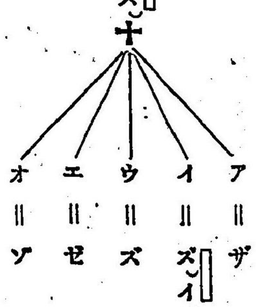
と成る。しかし、于は寧ろウに近く、上下脣の間に摩擦の音を生ずる事が、フにくらべると大に輕微であるから、聲で出したフとは、たゞちに見做す事は出來ぬ。

因に云ふ。ヲ行の中于ウの音は、若し存つたとしても、餘程夙く無くなつたものと見えて、之を示す文字も今は世に傳はつて居らぬ始末だが、其他のヲ以外のヰヱヲの三つの音は、比較的に永く世に遺つてゐて、現に之を示す爲の文字も傳はつてゐる。即、現今では、ヰをイ、ヱをエ、ヲをオと同じく發音するが、今から八九百年前までは、ヰを于イ、ヱを于エ、ヲを于オと明に言ひわけたらしい。其後に成つては、多分發音の勞力を經濟する爲に、ヰ、ヱ、ヲの發音の基音である于を漸次に除くやうに成つて、遂に、これらの發音を示す文字のヰ、ヱ、ヲの音價を忘れるやうに立ち至つた。それが爲に、オの字とヲの字との五十音圖に於ける所屬を混同して「ア、イ、ウ、エ、ヲ」「ワヰウヱオ」と云ふやうに書き示すやうに成つて近世まで來たのを、このオヲの所屬を明らめて、其正しいむかしに戻したのは、主に本居宣長翁の功蹟の一つで、その事は、翁の『字音假字用格』に詳しい。この事については、尙義門法師の『於乎輕重義』を見るがよろしい。

今までは、脣に關する音の説明であつたが、次に齒槽突起の中、上顎の前齒の裡手の齦で出來る音の話に移らう。

たとへば、ト[illegible]の音を出す時のやうに、舌を上顎に當てゝ、その後、舌の前の緣と齦との間から音を轢ませて出すと、一種の摩擦の音が出る。これを「いき」と「こゑ」とで出せば、サ行の基音ス[illegible]とザ行の基音のズ[illegible]とが顯れる。これに「ア、イ、ウ、エ、オ」を配當すると、次の通りである。

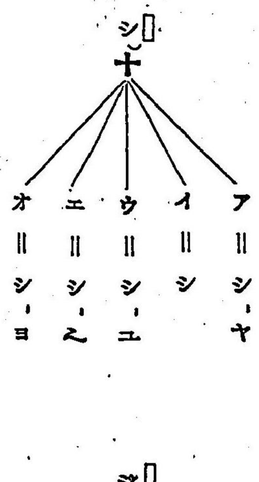


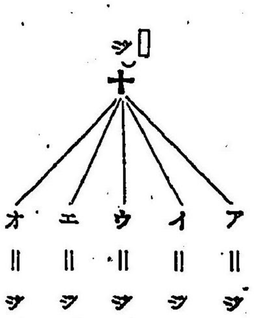


と成る。但し、ス[illegible]又はズ[illegible]に、イ[illegible]を添へると、シ[illegible]又はジ[illegible]の示す音に成ると思ふ人があるかも知れぬが、さうでない。今日の發音で云ふシ[illegible]又はジ[illegible]の音は、後に說くシ[illegible]の基音にイ[illegible]の添つたもので、別物である。また、茲に書き示したス[illegible]イ又はズ[illegible]イの音は、中央語にもなし、多數の地方語には存してゐないが、東北の地方語、たとへば秋田、山形などのことばには、正しく存在してゐる。彼の地方の人の云

ふゼ[illegible]又はゼ[illegible]文字の發音は、しばしばス[illegible]イ又はズ[illegible]イと發せられるのである。

ス[illegible]又はズ[illegible]を發する時の如くに、舌の緣のみを用ゐずに、舌尖を下の前齒の裡手に隱し、前舌面の平面を、前部硬口蓋の前のはづれから、門齒の裡面の着け根に至る、全躰の部面に近く寄せて、其間に殘る僅の隙から音を轢ませると、ス[illegible]又はズ[illegible]とは大に違つた響が生ずる。これが「シ-ヤ、シ、シ-ユ、シ-え、シ-ヨ」の基音のシ[illegible]である。即、次の通りに成る。



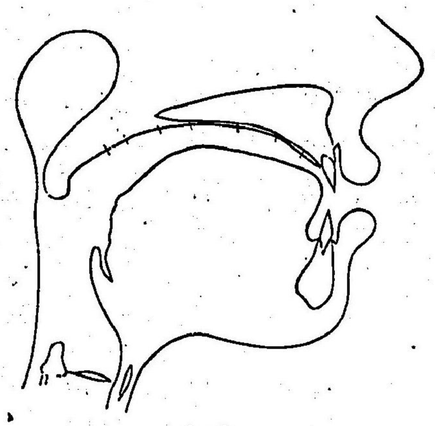


これで觀ると、ス[illegible]とシ[illegible]、ズ[illegible]と、ジ[illegible]との相違は、主に、摩擦の面の部位と廣狹とのちがひに由ることが知れる。

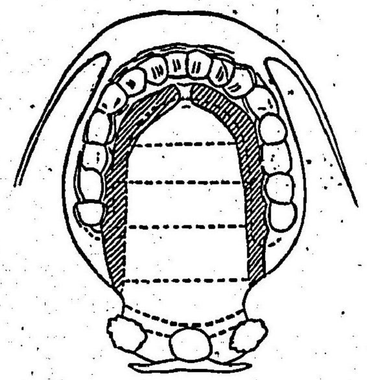
第十五圖

スとズの發音を示す。

(一)



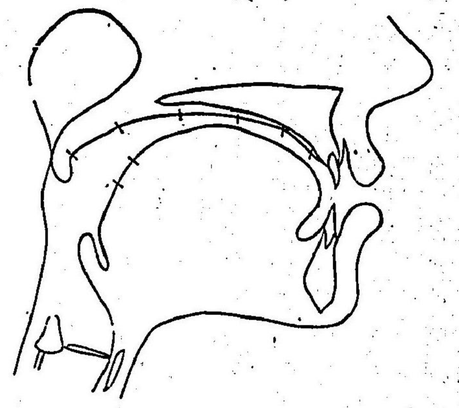
(二)



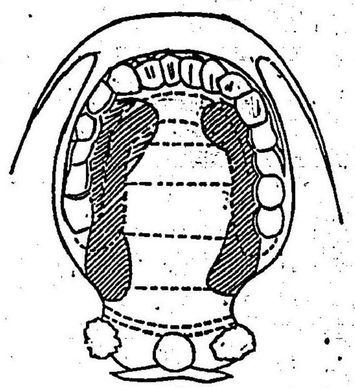
第十六圖

シとジの發音を示す。

(一)



(二)



ついでに言ふ。東北の諸地方語には、スシツチを混じて、明瞭に區別する事の出來ぬ傾があるが、これらは決して混同せらるべきものではない。たとへば、東京語の如きことばに於ても、今日では、ズとヅ又はツとチを區別する事が出來ない。しかし、文字で書き分けてある處を見れば、昔の人は、一々に言ひ分けたのである事は、勿論だし、現在の人の間にも土佐の人の如きは、今日でも能

くズヅ、ヂの區別を言ひわける事が出來ると云つて得意がつてゐる。そこで、昔の人は、どう云ふ風に言ひわけたかと考へて見ると、五十音圖の大躰の仕組から推定せられる通り、サ行の濁音は、

ザ、ズ(イ)、ズ、ゼ、ゾ、

と發音し、タ行の濁音は、

ダ、ド(イ)、ド(ウ)、デ、ド、

と發音したのであらうから、混同の起こらう患がなかつた。しかるに、後世に成つて、ド(イ)の音ド(ウ)の音を發音する事が多くの人々に困難に感ぜられるやうに成つてからは、その昔、ド(イ)の音を示したヂの字が、ド(ジ)(イ)の音を示し、ド(ウ)の音を示したヅの字が、ド(ズ)(ウ)の音を示すやうに成て來て、ジの音とド(ジ)(イ)の音、ズの音とド(ズ)(ウ)の音は、互に似寄つてゐる處から、遂に混同せられるやうな運びに成つたのだ。處が土佐あたりの地方語に於ては、他の地方語に於てよりも、古音の保存が餘計に出來たため、今日でもヂをド(イ)、ヅをド(ウ)と云ふ形で讀み傳へてゐるから、ジ又はズとの混同は、起こらずに濟んでゐる。そこでジ

ヂ、ズヅの區別が出來ると云つて矜るわけだが、いつも純粹の古代のヂ、ヅと云ふではなく、一語の第二章節以下にある時は、其前に必ヌ音を添へて發する風がある。

して觀ると、今日のヂもヅも、共に、其清音のチとツとの如く、單純の父音に母韻のイ又はウの添はつたものでなく、一種の複合父音に母韻の加はつたものである。之を見やすく示さうなら、

シ＝ゼ＋ン。　ス＝ヌ＋ゼ。
ジ＝ゼ＋ン。　ズ＝ヌ＋ゼ。
チ＝テ＋ゼ＋ン。　ツ＝テ＋ヌ＋ゼ。
ヂ＝テ＋ゼ＋ン。　ヅ＝テ＋ヌ＋ゼ。

と成る。

次に、ズの音を發しながら、舌の前の緣を、漸次に上の方へ卷き、其裡面が、齒槽突起の奥の堺に觸れて、舌の形は、さながら散り蓮華と云ふ燒物の匙の如くなり、舌の前の方がなかくぼに成つた時、舌の前の緣と齒槽突起との間から、音を

轢ませると、常のラ行音の基音が出來る。即ち

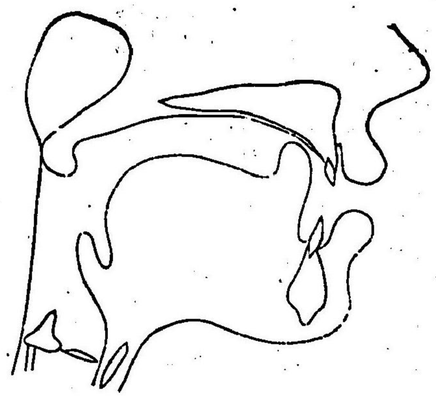
ル＋
ア＝ラ
イ＝リ
ウ＝ル
エ＝レ
オ＝ロ

である。ルはいつも、我國では「こゑ」を以て作られ「いき」を以ては作られぬ。但し、わが國にも、上述のルの外に俗に云ふ捲き舌のルがある。是は舌の位置と姿勢とを、まづトを作る時のやうにして、前部の舌面に力を入れずに、至つて柔軟にして、おいて、こゑを前部の舌面と齒槽突起との間から送り出すので、さうすると、氣息が少しづゝ漏れるごとに、推しのけられた舌は、原位に戻らうとする、それをまた氣息が推しのける、この二樣の働きの爲に、舌の前面は、さながら旗の風に翻るが如く、ばたゝと躍つて齒槽突起をたゝく。この際に生ずる音が即捲舌のルである。

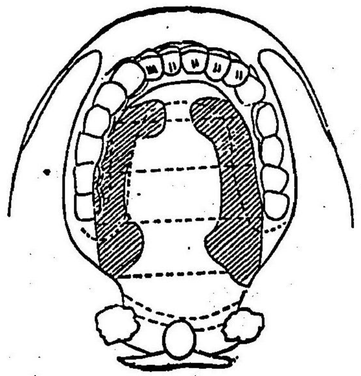
第十七圖

常のルの發音を示す。

（一）



（二）

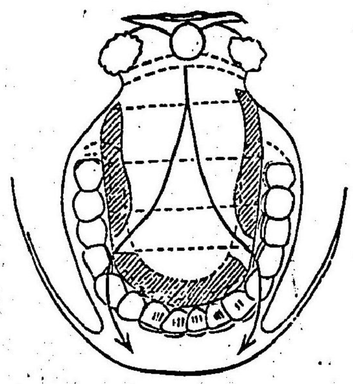


捲舌のルは極めて烈しい印象を、耳に與へるもので、それがため、強く勇ましいことばを用ゐようとする職人肌の人たちには、東京語に於て、盛んに用ゐられるのであるが、同じラ行音ながら、これとは全く違つて極めて柔和に響く一種の音がある。これは、東京あたりでは、俗に舌の長い人と云はれる物の言ひ方をする人に於ての外、全く聞かれない音であるが、東北の人の間には、往々認

めるものである。この音は英、佛、獨の如き國語に於ては、捲き舌のル（r）と併べて、盛んに使ふ音で、現にかの國々には、常のル（l）か、又は捲き舌のル（r）を示すr文字の外に、この音を示す特別の符合1が有る。茲では便宜の爲にる（ř）を以てこれを示す事にしよう。

第十八圖

兩側の發る氣のすを通息のをすの示路



さて、この音の出し方は、まづト（t）を作る時のやうに、舌を上顎に當て、然る後に

260934

舌の前部は當てたまゝにしてれいて、舌の右側左側、または左右の側を同時に、すこし隙して、其間から「こゑ」を轢ませるので、音が側面で出來る處から、この音を側音と云ふ。

側音

上に述べたラ（ř）行音の中、常のル（l）と側音のる（ř）とは、共に一種の摩擦音だが、捲き舌のル（r）は、摩擦音と云ふ常の名稱の下には、ちと收まりかねる。と云ふは別でもない、常の摩擦音は、出て行く氣息が、ある二つの靜止してゐる障碍物の間を擦つて過ぎて行くのであるが、この音は、障碍物の一つが他の物に撥ね當つて音を生ずるのであるから、常のル（l）やる（ř）とは一つ並に論ずべきでない。そこで、この音は、水上に躍る魚の、潑剌と潑ねるのに似よつてゐるから、刺音と名づけるがよろしからう。

刺音

ラ（ř）行音の話が濟めば、次は、ハ行音の說明である。ハ（h）行音の基音は、ホ（h）であるが、この音には、我國に用ゐられてゐるものゝ中に、二通りの別がある。

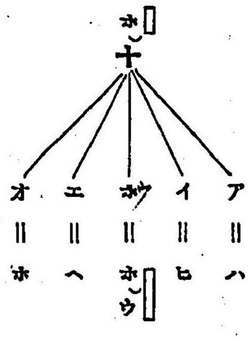
其一つは、常のホ（h）で、これを作るには、他の種々の父音を作る時のやうに、口腔又はその出口の唇を用ゐないで、母韻を作る時に、大に力を盡す、聲帶を用ゐる

ので、その用ゐる方は、これを寄せ合せて振動させて、所謂「こゑ」を出すのでなく、其三角形を呈してゐる縁に觸れて、一種の摩擦の音を起こすやうに、肺臓から急速に、氣息を輸り出すに在る。それ故、ホは一の清音である。（今、區別の爲に、ホ）音と書く）

今一つのホ音（今、區別の爲に、ほ音と書く）は、同じく清音で、今述べたものと甚だよく似てはゐるが、その出來處は全く別で、これは、ヤ行の基音（え）の發音の時の通りに舌唇の位置を定め、かくて舌と口蓋との間に出來る、狹隘な隙間から急激に息を轢ませて作るのだ。このほ音は東北地方のことばに於て、多く出遇ふものであるが、その地方に於ても、いつもエ又はイの前に見だされる。即その地方のセとシとが往々「ほ」エ「ほ」イを發せられるのである。

以上二種の中、ほの方は、其耳に傳へる響が、シのと酷だ似寄つてゐるから、一寸聽くと、ヘとひとが、シエとシとの、代からの習はしで、今日でも、ヒ（＝ホイ）の音を發する事をむづかしがり、そのかはりにシを用ゐるのも、初めの正しいヒ（ホイ）を失つて之をほイと發するやうに成り、ほイとシとの間に著しい似寄りのある處から、更に一轉してシと發するやうに、成つたものだらうとも思はれる。

ホにアイウエオの五音を配當すれば、いふまでも無く、



と成るのであるが、この中、ホウを今は用ゐずにフを用ゐる事、并にハ行を唇音に發する地方のある事、その理由等に就いては、既にフア行の話をする時、話したから、今は再び述べない。

第二四話　父音の分類

これまで、述べた處で、吾等が談話の際用ゐる主要な父音の說明は濟んだから、これからその分類の事を語らう。

父音を分けるに、清音と濁音との別に據る事、そのまた清音、或は濁音を、破裂音（また斷音とも）摩擦音（また續音とも）の二樣に分ける事は、既に讀者に告げた。且つ同じ摩擦音の中に、相互の區別を明にする爲、側音と刺音との名目を設くる事も讀者は承知してゐられる。これらの區別は、主に「いき」や「こゑ」の出來あがりの性質から設けたものであるが、かやうに分けたものを、この度は、音の出來る場所に由つて分けると、

(一)上唇と下唇とで出來る音。＝兩唇音。
(二)舌緣又は前舌面と齒槽突起とで出來る音。＝舌端音。
(三)中舌面と硬口蓋とで出來る音。＝舌身音。
(四)舌の奥と軟口蓋とで出來る音。＝舌本音。
(五)聲帶に息か摩擦して作る音。＝喉頭音。

と、さつと五つの分類が出來る。

今、これらと種々の名目に隨つて父音を配列してゐて、それに既に述べた鼻音と促音とを對照して相互の關係を明に示さう。

その一「いき」を以て作るもの。

	兩唇音	舌端音	舌身音	舌本音	喉頭音
(一)破裂音	プ	ト		ク	
(二)摩擦音一、常音	フ	ス シ	*ほ		ホ
(三)促音	ープ	ーツ		ーク	

その二「こゑ」を以て作るもの

	兩唇音	舌端音	舌身音	舌本音	喉頭音
(一)破裂音	ブ	ド		グ	
(二)摩擦音 一、常音		ズ ジ	ゑ		
(二)摩擦音 二、側音			*る		
(三)摩擦音 三、刺音		ル			
(三)鼻音	ム	ヌ		グ	
(四)促音	*ーブ	*ーツ		*ーグ	

父音、鼻音、促音、分類表。

(注意)表中の＊標を附けた音は、中央語にないものの。

第二五話　音の結合

今まで述べて來たのは、日本語の主な地方語に使はれて、これが原素とも云ふべき役目を勤めてゐる、單純な音韻の出來ぐあいに就いて既を成したのであるが、これらの單獨な音韻が、獨立に使はれる事は、母韻の外殆ど無いと云つても善い位、日常の言語には稀に用ゐられるので、通常は其結合した形で使用せられるのである。言を換へて云はうなら、わが國語には、單純な音で、一つの單語を示してゐるものが、今日のことばに就いて考へても、ア□(あ字の名)、イ□(意、胃、膈)、ウ□(鵜)、エ□(繪、餌、柄)、オ□(緒、尾)などの外、殆どないのみならず、これらの語も、辭書の中で出遇ふ時の外、單獨に存してゐる事は先づない、大概は、一つの文句の中に綴り込まれてゐる。それであるから、發音の學に隨ふものは、一つびとつの音韻の出來方を知るのも勿論必要だが、其一々の音韻が、いくつも連續して使はれる時に、前後の音の關係から、互に影響を受けあつて、單獨に絶對的に用ゐられたをりの模樣が、多少違つて來ると云ふ事を、知らなければならぬ。

さてこの事に就いて知らうとならば、まづ母韻の出來方に關して、次のやう

音の「かり」と「むすび」

な區別のある事を、合點するが必要だ。

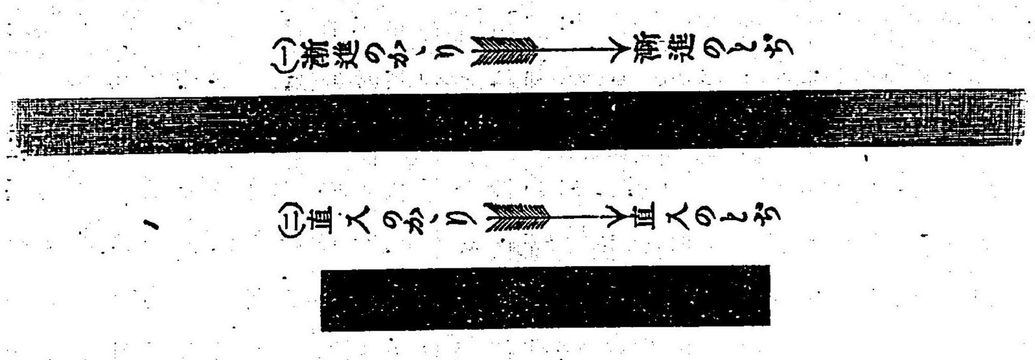
凡そ母韻はア、イ、ウ、エ、オのいづれに限らず、之を發するに當つて、聲門を閉ぢる事が必要の條件であるが、聲門を閉ぢて母韻を、出すまでの仕方に、肺臟からそろ〳〵氣息を送り出しながら、次第に其通り路の聲門を左右から推し寄せ、まづ其半分を鎖して一旦所謂「さゝやき」の音を出だすに至らせ、その境遇を經て更に一歩一歩閉鎖の度を增して、遂に全く聲帶を合せ、茲に初めて、常の母韻を聽くに至らしめるのがある。これを漸進のかゝりと云ふ。聲門のこの閉ぢ方は、ア、イ、ウ、エ、オ及びその他の母韻をして、ハ、ヒ、ホ、ウ、ヘ、ホ、などのやうな一種のかすれた音聲を伴はせる患があるので、聲樂の練習の時は、努めて之を避けるやうに敎へられるものである。

漸進かゝりとは大に違つて、母韻を出さうとする時、肺臟から氣息を送り出だす前に、聲門を閉ぢておいて、その後氣息を突き上げて、聲帶の波動を急激に、きつぱりと起こす事がある。この種の母韻の始め方を直入のかゝりといふ。日本語に於ては、概してこの直進のかゝりの方法で母韻を始めるのが

常式である。

母韻の始め方にとの二様の別がある通り、其閉ぢ方にも亦上述の二様がある。即、其一つは常の母韻を出しながら其通路の聲門を漸次に寄せわはせて、「そゝやき」の時の半開きの境遇を經て遂に全くの開放の位に戻し常の呼吸の時の通り母韻の跡を消すのである。これを名づけて漸進のとぢと云ふ。また今一つは之に反して聲門は閉ぢたまゝにしてゐきなから肺臓から氣息を輸送する事をふつつりと止めきはやかに音尾を括る仕方でこれをば直入のとぢと名づける。

今この母韻に就いての音聲のかゝりとぢをを墨色の濃淡で示そうならそつと次のやうに成る。



この二圖に徴して見ると、第一の中央の真黒の部分又は第二の全部は音の真の身体を示してゐるのでかく示されてゐる音をば音身と定める。即、第二の如き場合の發音は音身ばかりで成つてゐるのである。さうすると第一の場合の發音のやうに音身に達するまでの階段の部分及び音身から次第に去つて常の氣息に至るまでの階段の部分は音身とは區別されなければ嘘當でない。依つて今前者をば音首と定め後者をば音尾と定める。(一)に就いて曰へば音身の前後のぼかして示してある部分が即音首と音尾とである。

これらの區別は、單獨な母韻を發呼するに就いてのわかちであるが、ことばを話す際には、前にも述べた通り、單獨の母韻を孤立して用ゐる事は、至つて稀で、大概の場合には、之を他の母韻又は父音と併用するのである。ろの中の父音と併用する時の事は後段に説くとして、他の母韻と混ぜて使ふ事を云つて見ようなら、たとへば、アとイとを次ぎづぎに發音するにも、アとイとを無連絡に、二者の間に多少の間際を措いて、アイと云ふやうな風に曰ひ並べる事も出來るし、または、アイと云ふやうな風に、前音の足を後音の頭に接し、その間に間隙をおかずに、連續的に發音する事も出來る。これをたとへて云ふと、皷弓をひくのに、三弦の三筋の糸の中の一つを、轉柱に近き一ケ處に於て、食指で壓し、さてその糸筋を引弓を以て彈く時は、甲と云ふ一つの音が出る。その時、引弓を摩擦する事を少しも止めずに、また食指は壓したまゝにしておきながら、この度は無名指を伸べて同じ糸筋の今少し轉柱から遠い處を抑へると、乙と云ふ一つの音が出る。がこの場合には、甲乙の二音が互に連絡を缺いて孤立して耳に入つて來る。これは前述の無連絡のアイを示す比喩とするに宜しい。

次に引弓を前の通りに掛けながら、この度は、食指と無名指との二本を使はずに、まづ食指の尖りを用ゐて甲音を出す時、壓したと同じ場所を抑へながら、その指を糸に添へて、前に乙音を出す時に壓した處まで、ずつとこきおろす。このをりには、其當初と結末とに甲乙の二音を聽く事は、前と變らぬが、先とは連つて、甲と乙との間に、其間隙を補充してゐる、連絡の音、即、わたりがある。これは前述の連絡のあるアイを示すに、恰好な比喩だと思ふ。但し、甲乙の間の差は專ら音の高低の差異で、アイの間の差は、音の形の差が主なのであると云ふ事を忘れてはならぬ。また今一つ注意しておく事はアからイに移る際に、アの音尾が必しも「さゝやき」の狀態に達しないでも、聲帶の充分な皷動は、前例の引弓の手同樣、すこしも寛めずにおいて、音のわたりを成就する事が出來ると云ふ事である。

音の「わたり」

音節

ついでに曰ふ。アアと云ふ樣に、アとイとの間に、間隙を存して發音する時は、アとイとが各〻別の音で、アはアで、イはイで一本立ちの音の塊を成すので、耳にも明に二つの音として聽きとられる。今若し一塊の音を一音節と云ふとす

れば、二音節から成つてゐるのである。且つ▨と發する場合に於ても若しアとイとが輕重なく、共に平等に發音せられると、其間に音の間竭はなくとも、矢張二音節として耳に聽こゆて來る。しかし、若し其中の一つが、主に、十分に發音せられ、他が輕微に發呼されるをりには、輕い方が重い方に引きつけられて、其獨立の力を失ふ。さうなると、二者が相寄つて一塊の音、即、一音節を成すので、二音節とは認められぬ、否、聽きとめられぬのである。たとへば、『愛に溺れる』と云ふ時の愛の字の音は、アイだが▨ではなく▨てあるから、二音節を成さずに一音節を成す類だ。この外、アウ(逢)、アエ(饗)、アオ(青)、イエ(家)、オウ(追ふ)等も舊來の假字づかひに拘泥せずに、通俗に遣ふ通り發音すると、一音節を成してゐる事が知れる。かやうに、母韻の重つて一つの音節を成してゐるものを二重韻と云ふ。但しアウ以下に添へた▯と△とは、▯を重い母韻の標、△を輕い母韻の標としたのである。

二重韻

偖、さきには、母韻の上に就いて、音首、音身、音尾の區別を說いたが、父音の上に於ても、すこし超こそ違へ、やはり音の首尾、身躰の區別を建てる事が出來る。

否、建てられるのみならず、この三種の手つゞきが、一つの父音の產出に對する須要の條件で、音身ばかりの母韻は立派に成りたつ事が出來るが、音の首尾のない父音は、初から成りたち得ぬのである。さて其三種の區別は、ク▯に於て云つて見ようならば、この音を作るに就いて、まづ後舌面をば、軟口蓋に向つて高く上げ、且つ、ひたと彼をこれに推しあてゝ後ろから氣息を掛けて、ぐつと推す、これが第一の作用で、母韻について云つた韻首。第二は、この氣息の壓しをうんと固くこたへて少しもこれを漏らさじとする作用。これが即上に曰つた音身。さて第三の音尾は、かくこしらへた關門をば急に打ち開いて、つめよせてゐる氣息をば、急に切つて放つ作用である。この三つの差別は所謂斷音(＝破裂音)に於て、最著しいが、續音(＝摩擦音)に就いても、勿論認められる。

前にも述べた通り、單獨な母韻が一つの語(＝意味のある音)として用ゐられる事は、至つて稀てはあるが、悉皆絕無と云ふでもないけれども、父音に至つては、まるでないと斷言してもまづ差支ない。父音はいつも母音と組みあつて一つの音節を成し、こゝに初めて、ことばの中へ用ゐこまれるのが常であるか

ら、一つの單語の最初または最終に來るものゝ外は、その音首又は音尾を母韻の音尾、又は音首に接續するのである。これで、かく母音と首尾相聯なつてゐる父音は、ひと組ごとに一つの音節を成形する。わが日本語に於ては、殆ど一切の單語が、概して曰へば母韻のみ、又は、父音の音尾に母韻の音首が連絡して、出來た音節から成りたつてゐるので、便宜のため、古來かゝる音節を一字で示す文字が出來てゐる。即、今日用ゐてゐる假字文字である。たとへば、カ文字は、カ〔k〕の音尾とア〔a〕の音首とを接して成つてゐる一つの音節を示し、シは、シ〔s〕の音尾とイ〔i〕の音首とを連絡して成つてゐる一つの音節を示してゐる。蓋し世間一般には、二重韻と云ふものを單に二つの獨立の母韻の、木に竹を接したやうに、寄りあつたものと考へてをり、また、わが國には、古から今日の俗語に至るまでも、父音で終つてゐる音節もなく、父音の二つ以上重ねられる事も無いと人が信じてゐるので、獨立の父音を示す文字は、まづ一つも無いと云ふ始末だが、實は今日の東京語などに於ては、父音で終つてゐる音節も、二つ重ねられてゐる父音もあるので、特に後者などは、

チ　チ(父)＝ト〔t〕シ〔s〕イ〔i〕、＝ト〔t〕シ〔s〕イ〔i〕

ツ　ツ(筒)＝ト〔t〕ス〔s〕ウ〔u〕、＝ト〔t〕ス〔s〕ウ〔u〕

など云ふ、普通の語にも多く使はれてゐる事を知り、前者は『何々でございます』など云ふ時のす〔s〕等に顯はれてゐると云ふ事を忘れてはならぬ。かゝる場合には、曰ふまでも無く、チ〔t〕に於ては、ト〔t〕の音尾とシ〔s〕の音首との連接がおこり、ツに於ては、ト〔t〕の音尾とス〔s〕の音首との連接が成りたつのであるし、ず〔z〕に於ては、其音首と其前のア〔a〕の音尾との間に連接が出來るのである。

第二六話　音の輕重

音節の成りたちは、まづこれで一通り知れた事として、次に音の輕重の事を說かう。

既に、二重音の事、たとへば、アイ〔ai〕(愛)に於てア〔a〕とイ〔i〕との抱き合つて、一つの音節を成す事を話す時にも、其中の一つが重く、即、強く今一つが輕微である事を述べたが、二重に母韻の重なる時でなく、一つの音節が、他の音節と合して、二音節又はそれ以上の語を成す場合には、その中の一つの音節を、他の音節より重く、

力を込めて發音する事がある。例に就いて云へば、世人がよく色々の例に出す「はし」(橋)と「はし」(箸)とは、「は」を輕く「し」を重く發するのと、其反對に「は」を重く「し」を輕く曰ふので、東京人は區別する。即「橋」の場合には「はし」で「し」に力を込め、「箸」の場合には「はし」で「は」に力を込めるのである。また「いし」を「いし」と曰へば「醫師」の事になり、「いし」と曰へば「石」の事になる。

「アクセント」

これらの例に依つて、音節の二つ以上ある語に於ては、其音節の間に輕重を設ける事があると云ふ事實を認めてほしい。しかし、之は二音節以上の語に於ては、どの國のことばに於ても、輕重の區別が存すると云ふのではないから、大早計にさう心得てはいかぬ。即、イギリス語などに於ては、この音節の抑揚が極めて盛んに行はれ、尚も二音節以上の語には、必ず世の謂ふアクセント(强音)が其中の一つに置かれ、それがため英人は其いづれかにアクセントを置かずには、多音節の語を發音する事が出來ぬくらゐであるが、わが日本語などに於ては、大に事情が違つて、通例は、音節の多寡に係はらず、其中に輕重を建てずに、各音節を成るべく平等の音勢で發音することになつてゐる。偶ま前に擧げた「橋」と「箸」又は「醫師」と「石」との如きがあるが、これらは比較的に少數である。

日本語では、多音節の語でも、平等の音勢を各音節に持たせるが常だから、音の抑揚、即、アクセントの置き方の話などは、どうでも善いやうだが、實はなかなかさうでない。一つの語の中のアクセントの置いてある音節は、謂はゞ其語の骨のやうなもので、其語が色々に變轉して行く場合にも、他のものより一番保存されがちな部分である。この事を裡面から言へば、多音節の語に於て、アクセントの置いてない音節は比較的に崩れ易いと云ふわけだ。そうである以上、また日本語にも、音の輕重のある語の多少ある以上は、本邦語の單語の上のアクセントは、注意して研究せらるべき價値は、十分あるではないか。試みに「クサ」(草)「キップ」(切符)「スキ」(好)の如き多音節の語に就いて調べてごらん。「クサ」は字の表面は「クサ」と「ク〜ウ」と「サ＝ス〜ア」との二つの音節から成つてゐるのだが、實際では「ク〜サ」と發音される。これは何の爲か。これは「くさ」はその初は「ク〜ウス〜ア」であつたがアクセントが「サ」の音節にある處から「ク〜ウ」が輕く微かに發音され、其ウが遂に失せて、一音節としての獨立が出來なくなつたからであらう。

また「キープ」のキも元は「ク」イ」であつたのだが、アクセントが「プ」にあるので追々輕く發音され、とうとう其イがほどに置きかへられる樣になりはて、現今では、前半が「キ」プ」では無く「グ」ほ「プ」と發音されるに立ち至つた。「スキ」(好)のスも、今は「ス」ウ」でなく「ス」ばかりに呼ひ崩されたが、これもアクセントが「キ」に在るからに外ならぬ。此他「何々でございます」など云ふ時の最後のす音も今はス」に成つて、其前の「マ」と合併し、世帶を一つに合せて一音節を成してゐる。これも全く「す」にアクセントが無いからだ。アクセントの日本語に於ても大事に調べられべきものと云ふ事は、ほゝこれでも知れるではないか。

ついでに曰ふ。本邦には、アクセントの所在を示す、方法が未だ定まつてゐないが、發音學の說明などには是非何か定めて置きたいものだ。この事に就いては、既に考を公にした人もあるやうだが、自分の今思ふ所では、アクセントの置いてある音節の中央に、二重音が一音節を成してゐる場合には、二母韻中の、アクセントのあるものゝ背に、く標を加へるのが一番簡明だと思ふ。それで、この標を加へる前には、音節を、中間に＝標を挿入して、區別しておくが必要

音の抑揚の一定な調べ必要

である。たとへば「橋」は「ハ＝シ」「箸」は「ハ＝シ」「切符」は「グ」ほ「プ＝プ」とする類である。

なほ一つアクセントに就いて承知しておいてほしい事は、同じ國語の中にも音の抑揚の具合が處に由つて、まちまちで、此地方では平等に發音する於ても多音節の語を、かの地方では、烈しく抑揚を加へて發音し、甲の地では前の音節を強く言ふ語を、乙の地では、後の音節に力を込めて發呼するといふ次第で、極めて不揃である。然るに、そのまちまちの抑揚の仕方の中で一つが、國內の標準語とも見做され、他の地方語に亦んせられてゐることばで使用せらてゐる場合には、それと違ふ抑揚法に依る語は、斷然一つの方言として擯斥せらるゝので、たとへば、今日では、橋を「ハ＝ジ」と發呼するのを正しい發音と認めるとすると、これを「バ＝シ」と發音する地方の語は、牛をベコと云ひ、蝦蟇をドンコと云ふと同樣に、一つの方言として取りあつかはれるのである。それ故、地方語の改良を企てる人は、この點に深く留意せねばならぬ。

アクセントは、以上に述べ來つた通り、既に一つの音節を、他の音節より比較

的に重く強く力を込めて發音する事であるとすれば、今、一つの語の某の音節を強く發音する時に、たとへば切符の「プ」とつまる處、即、音の默止は、いくら強く力を込めて拵へて見た處で、發音する當人の感覺に力を込めてゐると云ふ心もちがするばかりで、聽き手の聽覺には一向その事實が知れぬ。これでは、役に立たぬから、アクセントは、其存在の認められ易い父音の中では續音、特に濁續音に加へられ、鼻音にも加へられるが、其最著しく加へられるのは母韻で、母韻に加へるのが、一番容易にアクセントの所在が知れるのである。

終りに、音の抑揚は一つの語にはかり存するのではなく、一と切れの文の上にもある。たとへば、「しかじかである」と說き定める、所謂肯定の文に於ては、全躰の語勢が尻さがりに成り、「しかじかか」と問ひ諮す、所謂疑問の文に於ては、全躰が尻あがりに成る傾がある類だ。これを文のアクセントと云ふ。

第二七話　音の長短と高低と音色

二つ以上の音節が、並べられる時に、その間に音の輕重をたてる事のあるやうに、二つ以上の音を組み合せる場合に、その一つを他のものより長く發呼する事がある。この事は、鼻音、又は父音の中の續音にも行はれ得る事だが、母韻の上に於て著しく認められる。たとへば「アー」(噫)のア韻「イー」(好)のイ音「クーキ」(空氣)のウ韻「ヤエー」(野營)のエ韻「コーリ」(氷)のオ韻はいづれも、長く引き延べられたものに外ならぬ。

この音の長短の別も、アクセントと同じく、日本全國到る處、どの地方語に就いて見ても同一であるとは云へぬ。同じ韻の發音の長短も、慣習に由つて著しく變つてゐる事がある。たとへば、關東辯では短かく發音する、母韻で終つてゐる一音節の單語をば、上方ことばではいつも長く發呼すると云ふやうな區別がある。即、歯、木、巢、手、藻の東京人の發音は、ハ、キ、ス、テ、モとみじかいが、上方人のは、ハー、キー、スー、テー、モーと長い。この長短の別も亦、アクセントの別同樣に、方言的の性質を組み立てるものであるから、方言改良を謀る人は、特にこの點に注意を要する。

音の長短は、重に母韻の上に於て認められるのであるが、音の高低に至つては、全然母韻の上にのみある性質と云つてよろしからう。が、しかし音の高低

は何に由つて生じるのであるか。これは言ふまでも無く、聲帶の鼓動の一定時間内の數の多寡に隨つて定まるのである。

今一本の三味線の糸を、ある二點の間に張つておいて、指の頭で之を彈じくと、糸は頻に振動して一定の音を出す。其振り止むのをまつて、このたびは先より一層強く、其糸を彈じいてごらん。糸の振動の幅は前より一層大きく、これに由つて出る音響も一層大きい。して見ると音の大小は振動の幅の大小で定まる事が知れるが、人間の聲の大小も既にかなり長く述べた聲帶と云ふ發聲の爲めの網を、肺臓から送り出す氣息で、強く振動するか、弱く振動するかに隨つて定まるのである。上に既いたアクセントは、この比較的に強い氣息で生ぜられた聲帶の鼓動を指すのに過ぎぬ。

音の大小の別は、先づかやうにして定まるのであるが、これをば音の高低と混同してはならぬ。先に例に出した三味線の糸の張りを一層強くして、前の通り指頭で彈じいてごらん。彈じき方の強弱は前と同じであるにも係らず、このたびは明かに一層鋭い、きんきん云ふ響を聞くであらう。これは、振動の

音の大小

音色

幅は前の通りでも、一定時間内の振動の回數が前より遙かに增加したからである。人間の聲の高低も全く同じ理由で、聲帶の緊張の度合の多少に由つて增減するに外ならぬ。

概して言へば、男の聲帶より女の聲帶、れどなの聲帶よりこどもの聲帶の方が渋く、みじかく隨つて緊張の度合がおほいから、それで、男の聲よりも女の聲、おとなの聲よりもこどもの聲の方が高く鋭いのである。男女の間の聲帶の長さの差は、ほゞ次の表で知れやう。

男	弛めた時……一八、二分一ミリ	張つた時……二三、六分一ミリ
女	一二、三分二ミリ	一五、三分二ミリ

但し、一ミリはわが國の曲尺で三厘三毛に當る。

音の高低の由て來る所は、これで知れたが、次には、所謂音色と云ふものは、どうして出來るかと調べると、まづざつとかうである。

尺八と琴と三味線三曲合奏をするとして。尺八で出す音の幅、即、大きさと、

高さ、即、鋭さと、全く同じな音の幅と高さとを琴と三味線とで出して見る事は至つてたやすい事であるが、その場合に、この三種の樂器の生ずる音響は、幅と高さとに於て、一致してゐるにも係はらず、三味線には三味線特有の音色、琴には琴の特有の音色、尺八にはまた尺八の音色と、銘々相同じからぬ特有の音色が、明かに聽きわけられる。その理由は外でもない、音響は、糸筋の認め易き振動に由つておこるにせよ、金石又は木竹などの割合に認めにくい振動に基いてゐるものにせよ、いづれも空氣の波動を生ずるのであつて、其音の波の形の大小に隨つて、音の大小が出來、また其音の波の打ち寄せる回數の一定時間内の多寡に隨つて、音の高低が出來る通り、其音の波の形狀の如何に隨つて、音色が出來るのである。それなら、其音の波の形狀を何が定めるかと云ふと、其波の打ち寄せる周圍の情況が、之を定めるので、たとへば、三味線の胴、笛の筒などは、三味線に三味線の特種の音色、笛に笛の特種の音色を與へるに、與つて非常の關係がある。人々の發音に、其大小、高低の外の、銘々特有ともいふべき、一種の音色を與へるのも亦、この道理の外はなく、主に聲帶の波動に基いて起こる音の波が、其周圍の、各人各箇特有とも云ふべき四壁の形態に由り、其間に出來る洞腔の形の差違に隨つて、各樣に成形されるからである。俗に云ふ十人十色と云ふ事は、音色の上に最もうまく當て嵌まるのを見ても、人々の發音機の構造の千差萬別である事を承知せねばならぬ。

以上の音の大小、高低の話、及ひ音色の話は、音響學の事を說いてある本には、必ず書いてある事であるから、苟も物理學の一通りの講釋を聽いた人には說明するまでも無い事ではあるが、人間の言語の原料である、音聲は、やゝもすると、物理學に云ふ、只の音響とは、別の物のやうに考へられ、隨つて別種の取りあつかひを施される傾向があるに由つて、蛇足とは知りながら、一寸一言茲に說き及んだわけで、決して他意はないのである。

第二八話　音韻の變化

發音の話も、意外に長引いて、今は讀者の倦怠を招く虞もあるから、なごりは飽までをしいけれども、この講述は、音韻の轉化に關する說明をざつと試みて、終局を告げる事としよう。

れよそ一つの國語の内に用ゐられる聲音は、たとへば日本語に於ては、母韻いくつ、父音いくつ、鼻音促音各、幾個と云ふやうに、始終一定不動のものではない。昔あつた音で今無くなつたのもあり、今あつて昔は無かつたのもある。また單純の一箇の音韻としては、昔にも今にもあるものではありながら、其音韻と他の音韻と組みあつて、音節を成して行く際には、昔あつた音節で今ないのもあり、これと裏うへなのもある。つまり一國語内の音韻の組織は、時に依つて變るので、この事實は、ハ音に關する話、トイ、トウ、チッに關する話を記憶してゐる讀者には、今更に曰ふまでもない事である。

一つの國語の中の音韻の組織は、時の古今に隨つて變るばかりでなく、處の東西に依つても亦同じく變る。同時代の同國語内に於て、こゝにある音韻で、かしこにないもの、かしこに在るもので、こゝに無いものゝ存在する事は、誰も知つてであらう。

就いて起こる問題は、同一の國語の内に、何故あつて古今の差、又は東西の別が生ずるかと云ふ一事である。この間に對する答は容易でないが、大要次の

通りと心得られてよろしい。

音韻は言語の原料である。言語と云ふは、音韻と云ふ原料の上に、意味を宿したものに外ならぬ。この事は、この講述の初に諄々しく說いたが、甲が乙に對して、言語＝狹い意味の、いつもの、所謂言語＝を以て、己の意思を傳へようとするには、一定の音聲に、一定の意味を宿さなければならぬ。たとへば、『ハナ＝ヲ＝ミル』と云ふ音の塊に、『花を見る』と云ふ心を運ばせる類である。即音聲と云ふ事に載せて、曰はんと欲する所の心ばゐを先方へ送つてやらねばならぬ。

しかる以上は、甲と乙と對話する時、まづ互に先方の耳に聽こゐるだけの音聲を發する事が必要である。そしてその音聲は、先方が、こちらの思ふ心を正しく聽きとつて、思ひちがへをせぬやうな形に、結合してなければ、勿論いかぬのみならず、音の長短、輕重に至るまでも、先方の誤解を來たさぬやうに配合さなければ成らぬ。

この事を行ふ爲には、語る者は、發音機の調節を謀らねばならぬ。脣、舌、口蓋、

喉頭等の諸部分を適當の位置に据ゑつけ、その据ゑつけた位置を、たとへ暫時なりと維持していかねばならぬ。しかる後は、またそれを取り崩して、更に他の位置に移さねばならぬ。これらの處置は、よしや、我々は、何の苦もなく、無意識に行はれていくやうであるにしても、我々に少からぬ勞力を費させると云ふ事は、小兒がことばを覺えるまでに、發音をよく間違へるのを見ても、また、大人が外國語を發音する時にも、發音に困難するのを考へて見ても、容易に合點がいく。

語る者の、發音の作用には、中々の勞力が費される事は、かやうであるが、その苦勞も、殆ど無意識に行はれるくらゐになるまでには、多くの歳月が、これに掛かる。その掛かつた長の年月の、我々の舌唇等の筋肉に與へる感覺は、容易ならぬもので、いつしか吾人の心に一定の印象を留める。ちやうど、氷のいつもつめたいものと云ふ事を感覺するにつけて、氷はつめたい物と云ふ心もち即印象が吾人の心に出來るのと同じ事だ。

これは、發音の作用が、筋肉の上に及ぼす感覺の話だが、外人の發音は、對話者の耳に聽こえると同じく、吾々自身の耳にも勿論聽こえるので、吾人の發する音聲は、吾人の聽覺に一定の感覺を生ずる。この聽覺の受ける感覺もまた、前の筋肉の受ける感覺と同じく、吾人の心に一定の印象を留める。

さうすると、發音に伴つて二樣の印象が吾人の心に留まるので、其一つは、舌唇等の位置に對する心もち、今一つは、音響に對する心持ちである。この二樣の印象は、いづれも常に念頭に浮んでは居らず、「ある時は丸で消え失せたもの」如く、吾人の知覺以外に沉んでゐる事もあるけれども、吾人の發音のたびごと、また發音を聽くたびごとに益々強く成つて行くし、且また、一定の事情の下では、再び吾人の知覺の範圍内に呼び入れ、ありありと心の目の前に浮き上がらせる事も出來るのである」。

位置と音響との印象。この二つの者は、音韻の轉化を繹ねる人には、誠に大切の事柄で、この二つが音韻の正不正を判定するに當つて、審判官の役目を務めるのである。それで、この重い役目を務める審判官をば、誰が作り出すかと云へば、既に述べた通り、吾人の、舌唇を動かす事と音を聽きわける事とに由る

のではあるが、それより今一段前に立ち入つて吾人がある一定の位置に吾人の舌脣等の位置を据ゑ、またはある一定の音を吾人の耳に聽いて、其位置を正しいと感じ、其音を正しいと認めるに至るには、如何なる手續を經るのであるか、換言すれば、吾人の位置と音響との感覺を正しいものと認めさせる標準は、どこにあるのかと、かう問うて見る。この標準は、吾人の育てられた周圍の人々の間に、專ら行はれてゐる發音をば、自分の耳次第に、聽き取り、また其發音をば自分の發音機で出して見て、その出し具合を、自分の發音の巧拙の度次第に、會得する。この二つの手續を經て、漸次に定まつて來るに外ならぬ。

して見ると吾人の所謂正しい發音に對しての標準は、耳で聽く方から云つても、亦口で發する方から云つても、いづれも各人の間に、銘々の聽く力、發する力の差のまにまに、多少の異同がある筈だ。しかして、この聽く力發する力は、人に由つて非常に差等のあるもので、一つ音だから誰にも一つに聽えるのでなし、この人に易く作られる音だから彼の人にも同じく容易だとは中々いかぬ。各人各箇の天然の生れつきの聽く力、發する力に差のある上に、生れてから後の、銘々の境遇の違ひで、若し虛心平氣で聞けば、たしかに同じく聽こえべき同一の音響も、甲はあゝ聞き、乙はかう聞くと云ふ差別が生じて來る。今一二の例を擧げてこの事を證明して見ようなら、琴や三味線の音にしても、ある人々は明かに二つなり三つなりの別々の音と思ふものをば、ある他の人々は全く同じものと、混じて考へてゐるのと同じで、吾々には、確かに別のものと聞き取られ、曰ひ分け得られる、エとイ、オとウ又はツとチを同じ音と認めてゐる人もある。これらは、適當な練習を受けない爲にも起こるし、また齒並が悪いとか、舌の働が不十分だと云ふやうな、天然の原因から來た例も誠に尠くはあるかもしれぬが、確にある。

既に聽く力と發する力に、先天の差違がある上に、生れてから後の銘々の境遇で、同じ音の聽き方が區々であるとすると、一時代の人から其次の代の人々、たとへば親から子、子から孫へと段々ことばが傳へていかれる間に變化の生じて來るのは、誠に避けがたい事で、幸に、あまり突飛な變化をすると、意味の不通をきたすと云ふ容易に破れない防禦の勢力があるから、甚だしい急激な變

通略延約

遷は、ないが、意味の通達にさしつかへの無い限りは、じりじりと何處までも變轉していく。さてこそ、既に諸君の知らるゝ通りの音韻の變化が我が國にも起こつた次第で、其變化をは或は通音、或は通韻、又は音便、音の延約などゝ云ふいろ〳〵の名目の下に、從來の文法家も說いてゐるが、たゞ茲に大に注意すべき事は、所謂通略延約なぞ云ふ音韻の變化は、從來の文法家の說く通りに、殆ど何の規則もなく勝手氣まゝに延べ縮めせられたり、五十音圖堅の條にあたる音ならば、自在にどれとでも入りかはるものとし、其横の條に屬する韻ならば思ふまゝに取り換へられたりするものではなく、必ず一定の則を辰んで變るものであると云ふ、大切な事實である。

音の變化は既に述べた通り、甲から同時に乙丙丁等へことばが傳はる場合に、甲の發音を受ける乙丙丁銘々の心身の狀態の如何に依つて、それぞれ別々に聞き取るのであるが、心身の狀態が乙丙丁とも假に全く同じいと見ても甲の說話を聽く時の三人の席の位置に依つても、亦それぞれ別々の受容をなす筈で、たとへば、甲が演說をする時、乙は會場の前の席で聽いてゐる、丙は中央で聽

聞く、丁は遙うしろの、演臺から餘程遠い傍聽席に座を占めてゐるとすると、乙には判然と聞こえる事も丙は稍不明瞭に、丁には尙一層曖昧に聽きとられると云ふ事は、物理上致し方のない事だが、此場合に乙丙丁の聽いた處に互に差異はあるにしても、不規則な、取りつきはのない差違があるのではなく、必ず其間に一定の規則正しい似寄がある。虎を猫と間違へ、葱を水仙と間違へる類は往々だが苟を水牛と取り違へる氣づかへはない。則ち、發音された時、聽く者に、類似の感覺を與へる音韻が互に通ふ傾があるので、緣もゆかりもない音が、いくら五十音圖の同列に並んでゐようとも、漫に通ふものではない。「へび(蛇)を「へ(み)」と云ひ、「かきけす」を「かきけつ」と云ひ、「奇妙な花」を「奇妙だ花(東北地方)」と云ひ、「らんぶ」を「だんぶ(鹿兒島)」と云ひ、「くみぐみのみづ(組々の水)」を「くりくりのみる(大坂の一部)」と云ふ類は同一の音響上の特徴を有つてゐる音の變轉に外ならぬのである。例ば「び」と「み」が、なぜかよふかと云ふと共に唇音であり、共に「こえ」を以て作られる音であつて、互の違ふ所は、一は口音で他は鼻音である事で、此二者が耳に生ずる音の感覺が、著しく似てゐるからで、尙その他の音の

間に類似のある事を知りたくば、一〇五頁に掲げておいた「父音鼻音促音分類表」に就いて一考せらるゝがよろしい。必ず大に合點がまゐる事と信ずる。』

今述べたのは主に音の轉換の方面であるが、音の延約の方面にても、箇人的又は團体的の特性が、音韻の轉化に及ぼす影響は、劣らず盛んなもので、ある一箇人が自分の從來の經歷上からか又は其の本性上から、たとへば「書きて」と云ふ事を發音する事を嫌つて、之を「かいて」と發する時、之を聽く人々がク音の省略せられた、この後の形の方を默許するのみならず、これを便利として追々採り用ゐる場合には、き音が崩れていとなつてしまふ。(因に云ふ、きのいに成るは、ク音が落ちて失せてしまうのだから、びがみとなる類とは違ふ。所謂かよひでは無くくづれである事を忘れてはならぬ。)「かきあり」を「かけり」と云ひ、「しろく」を「しろう」と云ひ、「はき」を「はうき」と云ふ類は、いづれもこの部類に屬する。

發音の都合の上から、音を省く事があると同じやうに、音を添加していく事もある。一例を云はうなら、東北地方ではガ行とダ行とバ行との中、一つに屬する音が、語の中途又は終りに出る時には、ガ行にはン音、ザ行にはヌ音、バ行に

はム音を、それ〴〵添へて發音するのが常で、たとへば

そば(側)を　ソムバ　と云ひ
うで(腕)を　ウヌデ　と云ひ
けが(怪我)を　ケンガ　と云ひ

これで、かやうに添へられる鼻音は、或る單語に於ては著しく響かせられ、之を文字に寫すときも、んの字を以て書かるゝやうに發達して來る。牛蒡を「ごんぼ」と云ふ類で、文にも「何々せずば」を「何々せずんば」と言ひもし書きもする。「だご(團子)」を「だんご」と云ひ「やか(八日)」を「やうか」、「ぜんあく(善惡)」を「せんなく」と云ふ類は皆この部類に入るべきものだ。

また發音の變化は發音者又は之を聽く者の特性でいろいろに成つて行く事は、「つるべ(釣瓶)」を「つぶれ」と云ひ、「ちやがま(茶釜)」を「ちやまが」と云ひ、「からだ(身体)」を「かだら」と云ふ類でもわかる。古代の「あらたしき(新)」を後には「あたらしき」としたのも、此影響を蒙つたに外ならないのだが、是は話す者又は聽く者の音の組み合せ方に就ての思ひちがひに起因するもので、これとすこし違ふが、發音

を耳で聽かずに頭で聽く處から、音韻の變化を招く事がある。これも箇人的特性の、音韻變化に及ぼす影響の一例だ。耳で音をきかずに頭できくと云ふのは、犬は「わんわん」と吠えると思ひこみ、郭公は「てつぺんかけたか」と鳴くと相場をきめ、更に疑はぬものだから、犬の吠える聲は「わんわん」ときゝなされ、郭公の聲は「てつぺんかけたか」と聞き做される類を云ふので、これは已の耳に來る音を腦で勝手に變更して聽く結果だ。このやうに他人の發音を聽くとき、その發音の示す意味が、何やら聽きなれぬ場合に、已の知つてゐる單語を穿鑿して、其中から一つ二つを探りだして、其耳なれぬ語の意味を何とか古事つけ、自分の心のおちつきを謀る事は、往々認められる人間の性の一つである。たとへば「らんびき(蒸溜器)」のびきを闌引など書いて、何やら引き絞るものゝやうにもひなし、「せるぢ(織物の名)」のぢを「きれぢ」などのぢと同じものと考へる類で、この勢力の有る爲に、ステーションがステンションと變り、宋襄の仁が總領の甚と變ずるので、英國人がアスパラガスと云ふ植物を古事つけてスパローグラス(雀草の意)と變へたのも、全くこの勢力に支配せられたのである。

音の變化は過然に非ず

かやうに說いて來て見ると、音韻の變化には、一々それぞれの理由があるので、一として輕々しく、偶然に起つて來るのでは無い事が知れる。中々、或る人々の考へるやうな、勝手な無造作なものではない。

音韻の轉化に。自然の理法のある事が知れゝば、從來の和學者流が、通略延約などゝ稱へて、音の增減や變遷をば、其音の性質や立ち場に關係なく、殆ど思ふ存分に取りあつかつたのは、學問上、危險千萬なる事も、隨つて合點が往くし、所謂音便などゝ云ふ事には、其扱ひやうの如何に由つて、餘程有益な興味の澤山ある解釋を施す事も、自ら出來る樣になる。音韻學の敎へる諸種の事實を基として、過去に向つては、本邦古來の音韻の各種の變化に適當な理由を附け、彼の一音一義說(五十音の各に、マには圓滿の意、カには堅牢の意など、一々意味が含まれてゐると云ふ說)が、どの位まで眞理を含有してゐるかを調べて見、また現在と將來とに向つては、標準語の音の練習、地方語の發音の矯正など云ふ國家の大事業に隨ふのは、諸君、大切ではないか、諸君面白いではないか。

しかるに、この有益な智識は、今日まで吾が國の人々に、其眞の價を知られな

いで、一方では理科、數學、博物の智識が、日を追つて增進して行く、うれしい、ありがたい大御世に、同じ物界學に屬して居る、この物學びは、不幸にも顧みられず、昔ながらに、「チコ」を、「チズミコノム」の轉と考へ、「タカ」と、「ツバクロメ」と同じ語と認めかねぬ今日、彼の假名がへしの法＝假字と云ふ專用の重寶な文字の無いので、字音を示す假字づけの出來ぬ處から、苦しまぎれに支那人の工夫した反切と云ふ一種の假字づけの法式を、專用の重寶な假字のある、吾が國に持ち込み、五十音圖に當て篏めて、語源を探るに用ゐる方法＝の勢力が未だ衰へぬも、一應もつともとは云ふものゝ、國家のため、大に憂ふべき事である。

わかれのことば

結末

これらの嘆息の一日も早く減ぜよかしと、束の間も忘れず祈る片手仕事に、まんざら無いより增しであらうと、少からぬ頁を塡めて、こゝまでは說いて來たが、何事も足らぬがちの身、筆の運びも思ふに任せず、あまりの下手の長談義も、自分ながら心苦しい故、音韻に關しては、發生の樣、結合の模樣、變化の具合に至るまで、畧ぼ一とわたり話しをへたをしほに、茲に一とまづこの篇を閉づる。

なにとぞ、讀者諸君、卑近なと蔑まず、淺薄なと嘲らず、些なりとも善い所、ためになる所があるなら、それを採り用ゐ、それを推し擴げて、この文を書いた著者の本志の、あくまで通るやう、偏に謹んでお願ひまをす。

發音學講話をはり

明治三十四年十一月十七日印刷
明治三十四年十一月二十日發行

發音學講話
定價金六拾錢

著作者　岡倉由三郎
發行者　高橋儀市　東京市神田區小川町一番地
發行所　飯島廣三郎　東京市神田區西小川町一丁目九番地
印刷者　白土幸力　東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三光堂　東京市神田區美土代町二丁目一番地

不許複製

發兌元
寶永館書店　東京市神田區小川町一番地
兩文館書店　東京市神田區西小川町一丁目九番地

金井保三先生著

第二版 日本俗語文典

全一冊

洋本頗る美裝本
定價 金七拾五錢
郵稅 金拾錢

在横濱市清國人發行「清議報」の批評(翻譯)

此書は金井保三先生の著はす所にして音訓(音韻)字句(言葉篇段(言葉の組立)及轉折承接(言葉の句切り)法の四編に分ち剖析微に入り指示隱れたる所なし蓋先生其國語を他國人に敎授せる經驗多きが故に惟に語法の繁變に精通せるのみならず且つ深く學習者の了解し難からんことを懼れて極めて其順序に注意し又語を擇るもの應用常に誤るを見て說明一段の詳細を加へたり其苦心孤詣凡そ其敎を受くるもの固く之を信じて之を稱せざるはなし此書即ち課餘の筆記より錄出したるものなれば用語極めて簡明平易に立論尤切實適中誠に東語(日本)敎科書中の鴻寶に屬す故に東語に速通せんと欲するものゝために特に玆に之を紹介す

理科大學敎授理學士
高等師範學校講師理學博士 横山又次郎先生編

中等地文學

附地文學術語表

（文部省檢定濟）

修正第四版

洋假裝美本全一冊
定價金六十錢
郵稅金八錢

横山理學博士の手に成れる地學に關しての敎科書、數ある中に博士が尤も意を注ぎ力を用ひられたるは實に地文學の敎科書なりとす然るに博士の熱心なる從來の著を以て足れりとせず尙進で之が改良校訂を企圖せられ、當局敎員諸氏に遇ふ毎に其意見注文を叩き又深く自家の地文學講師として高等師範學校に於る多年の經驗を編み、久しく熟慮考案中の處其果遂に結晶して今回發兌の此中等地文學とはなれりされば其記事の難易の其中を得て汎く中學校師範學校の敎科書として最適實なるは復喋々を要せざるなり大方の諸君子請ふ之を普通の廣告文視することなく本書を實地に運用して其の眞價値妙趣味のある所を知られんことを

本書出版以來(卅四年)府下各中學に於て敎科用書として御採用の榮を荷ひし御校名は左の如し各地方に於ては其御校名を詳細に知るを得ず發賣部數に依り推定せば凡四十餘校

いろは順

郁文館中學校○早稻田中學校○日本中學校○日本女子大學校○獨逸協會中學校○東京府第四中學校○東京眞宗中學校○開成中學校○大成學館中學校○京北中學校○京華中學校○錦城中學校等

理科大學敎授兼高等師範學校講師理學博士 横山又次郎先生著

○續中等地文學

全一冊 近刊

理學博士　横山又次郎先生編

參考世界地誌

全一冊　近刊　千餘頁

本書は邦語世界地理の尤も精細なるものにして參考用書として遺憾なからんことを期せらる

地理學講義

理學士　山上萬次郎先生の最新の著述

全部六卷

第一卷 上下	◎本の部	定價金七十六錢	郵税金八錢
第二卷	◎南の部	同 金六十五錢	同 金八錢
第三卷	地文の部	同 金六十五錢	同 金六錢
第四卷	地文の部	近刊	
第五卷	外國の部	近刊	
第六卷	外國の部	近刊	

本書刊行の主眼は檢定受驗用及獨習用書として著述せられたるもの也

理學士　山上萬次郎先生校閲
鈴木鎮太郎先生著

◎日本輪郭地圖

全九枚　正價金九錢　郵税金二錢

一、日本全圖　二、本州全圖　附北州及臺灣　三、本州東北部
四、本州東部　五、本州中部　畿内、伊勢灣、若狹灣及大阪灣　六、本州西部
七、九州　八、北州及千島　九、臺灣及南西諸島

◎萬國輪郭地圖

全拾枚　正價金拾錢　郵税金二錢

一、世界全圖　二、アジア全圖　三、朝鮮及び遼東半島
四、支那本部　五、オセアニア第一、第二　六、ヨーロッパ全圖
七、ヨーロッパ中部　八、アフリカ全圖　九、北アメリカ全圖
一〇、南アメリカ全圖

高等師範學校教授東京外國語學校教授兼東京音樂學校講師
岡倉由三郎先生著

第二版 新撰日本文典 **文及び文の解剖**

和本全一冊　定價金廿七錢
頗美本　郵稅四錢

本書は文法家として雷名高き岡倉先生が多年の苦心と經驗に依り中等教育を受くる者の爲に本邦語の結構を簡明に說かれたる者にして課を分ち節を定め一課毎に練習問題を附されたれば教科用書として極めて適切なるは勿論文法を學ぶ者の最も難しとせる文の解剖を新案の圖式を以て明瞭に解析せられたるが故に參考用書として一般學ぶ者の好伴侶たるを疑はず在來各種の文法書を用ゐんとする者は必ず本書に就きて本邦語の格式に通じ之を基礎として進むに於ては蓋し得る所大なるべし

言語學會雜誌の批評

今回出版されたのは、日本文典中、從來學者の深く意とめず、學生の困難を感ずる所の「文及び文の解剖」の部で所說こいひ說き方こいひ、さすが老練の著者として上手に出來てをる。加ふるにジユエル氏の解文圖式より思付かれた新案は尙ほ幾多改良の餘地を存するにもせよ、(一)文章の各部の關係を一目に認め得る事(二)原文を用ゐずして文章の格式を示し得る事、(三)二個以上の文の組織を畫圖に比較すると同じく、引き比べ得る事、等の長所があるから敎授者が廣く實地に應用してみたら、非常な便利を得るでだらうと思ふ。吾々は近時出た敎科的文典及び文章法を取扱つたものゝ中最も實用に適し最も簡明平易で、わかり易く、敎へ易い良書として、國語敎授者にすゝめるのである

高等師範學校兼外國語學校教授岡倉由三郎先生著

新撰日本文典 **働くことば**　全一冊　印刷中

發音學講話　全一冊　洋裝頗美本　定價金五十錢　郵稅金八錢

文科大學講師文學士保科孝一先生著

國語教授法指針　新刊　全壹冊　洋裝頗美本　定價金五拾錢　郵稅金六錢

言語學と聲音學の智識のない人が組織した國語教授法は必ず失敗に終ると言語學の泰斗スヰート氏がいわれた誠に至言でめる今後の國語教授法に幾多の刷新を謀るにわ必ず言語學と聲音學との上からまづ其の根本問題について深く研究しなければなりません

本書わ斯學に造詣深き保科文學士が以上の立脚點から今後の國語教授法について丁寧に解明せれらたもので國民教育に從事されて居る諸君わ必ず一讀の必要がありましよーと信じます

●苟くも國語を綴らむと欲する人の必要缺くべからざる寶典なり●

高橋龍雄先生著

訂正第四版

國語綴字法

洋裝美本全一冊　正價金二十二錢　郵稅金四錢

●本書は著者が多年の經驗によりて中學初年級の生徒に國語の假名文字の書きあらはし方など凡て讀書取作文を最も正確に迅速に習得せしめむが爲めに作りたる者なり

●本書の特色は專ら實用的の語法の言語學的に之が語根を說明し器械的諳誦を排して智力的記憶に據らしめむとするにあり

●本書の有益なるはいかにして國語を書きあらはすべきかといへる一問題の系統の下に國字を以て外國語の綴字法の如く敎へむとするにあり

●本書は文章最も平易文字最も實用的にして中學生徒及び高等小學校生徒のみならず凡て一般社會の人に國字を以て文を草せんとするもの、必要缺くべからざるの寶典なり

文學士　藤岡勝二先生著

○國語學講演　全一冊　近刊

文學士　八杉貞利先生譯補

○外國語敎授法　全一冊　近刊

文學士　新村出先生著

○言語學講義　全一冊　近刊

文學士　新村出　文學士　八杉貞利　兩先生合著

○聲音學初步　全一冊　近刊

言語學會々長文學博士上田萬年先生
同　代表者文學士新村出先生
言語學會編纂

言語學雜誌

毎月十日發行　定價金十二錢　郵稅二錢

三木留三先生著

新刊

中等代數學

全二冊　洋裝美本上卷發行　定價金六十錢　郵稅金六錢

本書は著者が多年の經驗により幾多の時日を費し新式の敎授法に依り極めて親切に編纂せられたる者にして實地に就き數十回の敎授を試みられ初めて公けにするを許されたるものなり其內容に至りては喋々するを欲せず實地に運用せられ其虛ならざるを知られんことを

日本本地名辭書の著者
落後生吉田東伍先生著

二版

海の歷史

全一冊　洋假裝美本　定價金二十六錢　郵稅四錢

吉田先生夙に史家として名聲江湖に鳴る此頃流麗の筆機警の識を以て備さに本邦に於ける海の史的沿革を叙せらる蓋近來稀有の一大奇書なり海を欺て海に居り又海を想ひ海を知らんと欲せらる、諸君は請ふ一讀せよ

吉田東伍先生著

○陸の歷史　全一冊　近刊

文學士隈本繁吉先生著

○歷史研究及び敎授法　全一冊　近刊

瓜生喬先生著

第二版

江戸時代の武士

全一冊洋假裝頗美本　定價金四十錢　郵稅八錢

本書は江戸時代に於ける武士道の相異と變遷とを論じ兼て上下三百年間の風敎を叙し筆鋒委々時に當年闇黑界の情態を剔發して備さに武士道の關係を尋繹論明せり故に本書の如きは一面に於ては江戸風俗史の要を兼備せりと謂ひつべき也初版は一ケ月に滿ずして盡き今や第二版を發行なす陸續御購求の榮を賜らんとを

文部省普通學務局長
文學士澤柳政太郎先生著（第十一版）

正訂 讀書法

洋假裝美本全一冊　定價金貳拾錢　郵稅四錢

書籍の効益は實に大なりと雖漫然雜讀するのみにては格別の利なし若し其効益を完ふせんとせば讀書の法則を知らざるべからず本書は心理學の大家「ベイン」故エール大學總長「ノア、ポルター」敎授「リチアドソン」等諸學者の讀書法に關する著書を參考して著述せられたる者にして今日に最適切の良書なり學科の何たるを問はず苟も書籍を手にせらるゝ諸氏は先づ本書に就て讀書の法則を窺ひ學科の何たるを問はず而して後繙かるべし法則に從て讀むと之を知らずして讀むとは其効果必ず雲泥の差あらん本書は眞に學生必讀の良書也

文學士　塚原政治先生著

感情の心理學

全一冊　近刊印刷中

著者は當分發表せず

教育學概論

全一冊　近刊

倫理學概論

全一冊　近刊

心理學概論

全一冊　近刊

田邊松坡編選

明十家詩選

白紙中本唐仕立（十卷全五冊）　每冊　正價四十錢郵稅金四錢

本書は松坡先生が多年の苦心を以て明の劉青田高青邱季西涯李崆峒何太復徐廸功季滄溟王弇洲謝四溟陳子十大家の全書中の名篇佳作を編選せられたる者にして今劉高二家合卷一冊を發賣す斯道に志す士は必ず一本を備へざるべからず

文學士法學博士　天野爲之先生著

經濟學大意

全一冊　近刊

普通經濟原論

全一冊　近刊

經濟學論

全一冊　近刊

エトヲ-26

法學博士文學士
天野爲之先生著

第五版

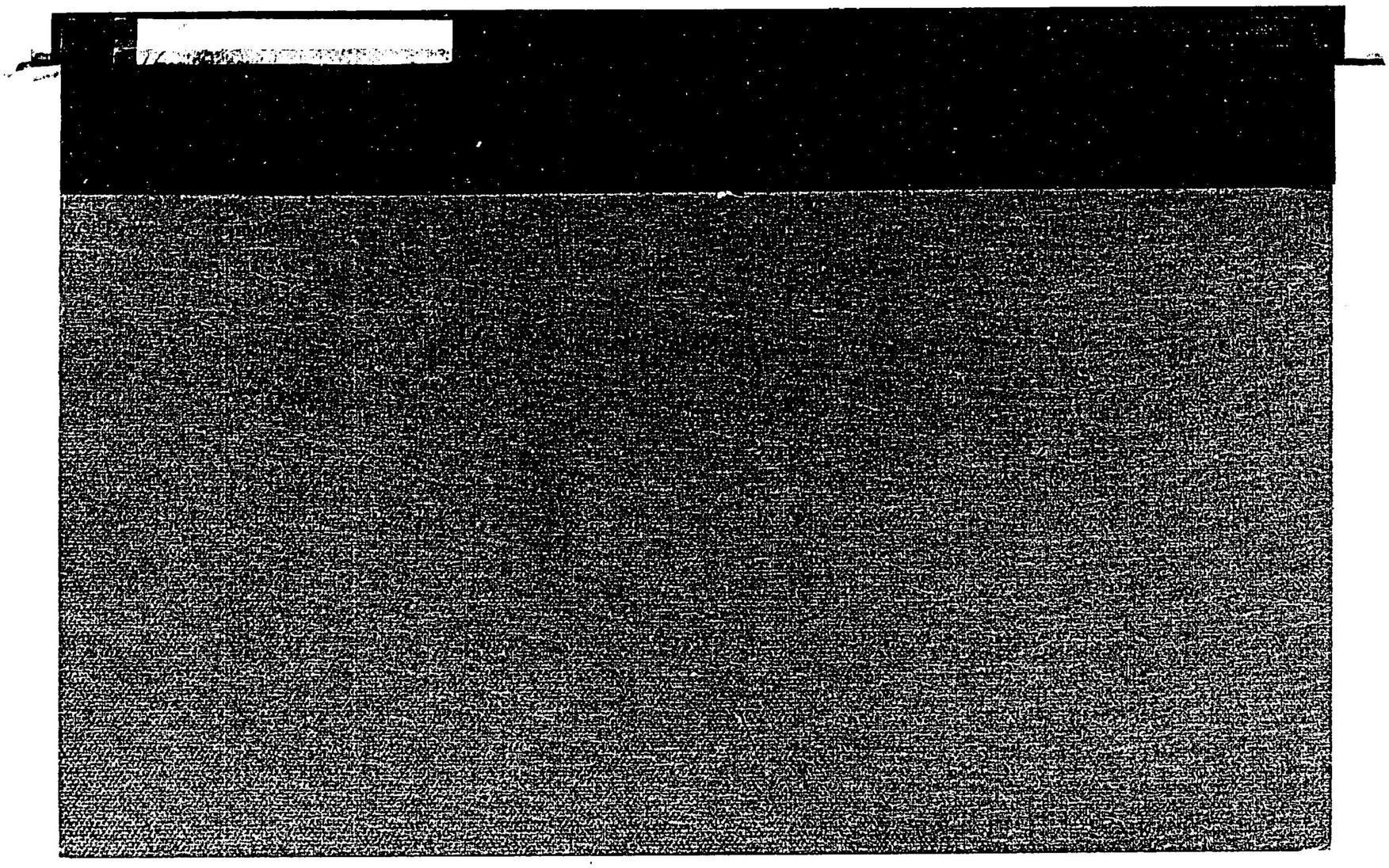
勤儉貯蓄新論

全一冊洋假裝美本　定價三十錢　郵稅六錢

今や投機奢侈の弊邦家を傾けんとす之を救ふの法唯だ勤儉貯蓄の奬勵にあり國家經濟の泰斗として雷名天下に轟く法學博士天野爲之先生夙に此を慨し即此著作あり此書や投機奢侈の害毒勤儉奬勵の必要及其方法等を極めて簡明に詳密に卓拔に論ぜられたる者將又理を推し數を抑へ古今を俯仰し東西を反顧し眞に堂々たる大文字なり世の實業家政治家及教育家は勿論苟も日本臣民たる者特に子弟教育の任に當らるゝ諸君は必ず一讀せざる可らざる寶典たることを疑はず

以上の外教科用書印刷着手中のもの數種有之候教科用書御入

定の節は一應御申越被下度希望仕候



811
0467

077291-000-6

811.1-0467h

発音学講話

岡倉　由三郎／著

M34.11

DAC-0488